
Rewrite of LuckyStar

鳳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rewrite of LuckyStar

【Nコード】

N9130T

【作者名】

鳳

【あらすじ】

「心霊学者とかだとリアルで堅苦しいし、霊媒師っておばあちゃんってイメージがあるし古いし、うん、そうだ。ならやっぱ俺の将来の夢は『魔法使い』だ!」中学生の頃、そんな妄言の所為で友達がいなかった俺、遠野湊とはある事情で陵桜学園に転校することとなった。

とある男子の転校初日（前書き）

、将来の夢は魔法使いになること！！

それが、中学生だった頃の俺の思い出だった。…ような気がする。

『らき
すた』

とある男子の転校初日

6月20日 梅雨入り

外 …… 大雨。

今日は俺、とおのみなと遠野湊の転校初日の日だった。

「いきなり大雨ってどういうことだよ」

2階の我がマイルームの外はザーザーッ！……！とテレビの砂嵐のような轟音が鳴り響く。

俺が朝、最初に聞いた音がまさに雨の音だった。

せつかく新しい青春の第一歩を歩もうとする青少年の朝が大雨って
どういうことなんだ。

「くそつ。まだ道も覚えて無いから朝はゆっくりして行こうかと思
ったのに滅茶苦茶気が滅入る。オウ…、ダレカワタシヲゲンキズケ
テクダサーイ」

くだらないこと言いながら身支度を終えた俺は早々に家を出た。

が、予想以上に外の状況は悪い。

「おいおいおい！！これって雨のレベルじゃねー！！傘！？傘が
折れちまうよーーーー！！！！」

とりあえずがんどこと進んでいる間事情を説明しよう。

実は俺の元いた高校はとある事情により廃校になってしまった。それでもって急遽今の学力でなんとか入れる最大が陵桜学園だったのだ。

緊急事態ということもあってか試験は俺でもそれほど難しいものでもなかったし。

両親はしがない商社のサラリーマンで普段は家にいない。

そういう込み入ったようなそうでもないような理由で俺は今、嵐としか言いようのない豪雨の中、駅に向かって前進していた。

「うおお、がんばれサンダー！！！！（今命名）。ゴールはもう少しだ！！！！」

俺は傘を前寄りに押し出し強風から身を守る。

ちなみに傘の名前の由来はただ傘の色が黄色だっただけである。

1

陵桜学園の最寄の駅の周辺は地元よりやや雨脚が弱かった。といっても大雨であることには変わらない。

「うわ…、制服びしょぬれ。絞るとすごそうだ」

ちよつとしょんぼり…。

さて…問題はここからだ。

俺はとりあえず回りを見渡してみる。

似たような制服を来た学生。主婦っぽい人。スーツを来たサラリーマン。

こんな雨の日でも駅前はごたついていた。

さつきも言ったが俺はまだ学校まで正確な道のりを完全には把握しきれていない。

念のため携帯のGPSに登録はしてあるがこういう類はあまり使わないので正直不安だ。

周りを見渡すと似たような制服を来た男子がそこそこいたのでそれにこっそりついて行くことにした。

「うーむ、我ながら情けない気分……、ひい！？雨冷たい！！やっぱしこの傘小さいんだよなあ。あ、サンダーだった、ごめんごめん」

相棒の名前を忘れるなんて俺としたことが、

「……うつ、ひつく……、」

「……？」

「お姉ちゃんあん……」

だれか泣いてる？

ふと足を止め左右を見ると食い荒らされたようにボロボロになった傘を片手に持って泣いている女の子がいた。

見たことないセーラー服を着たの女の子は俺と同じくずぶ濡れでまだ開いてない駄菓子屋の小さな屋根にポツンと立っている。

人通り…なし。

「あ、前の男子見失った！…余所見しちまった所為か。まったく、転校初日からハードだぜ。……まあ、ほっとけないしな」

「うつ…ふえええん」

「あの〜」

「ひつく…、え？」

俺はゆっくりと近づく。

「君は…？」

「ああその、別に怪しい者じゃないよ？ただちょっとこんな大雨の中で泣いてる子がいたからどうしたのかなーって思ってたさ」

「そうなんだ。ごめんね。…うつう。今日お姉ちゃんがクラスの友達と用事があるって言って先に行っちゃったから今日は1人で学校に来たんだけど、さっき傘が壊れちゃって」

「ここで立ち往生してしまった。と」

「うん、ふえええ。お気に入り傘だったのにい」

「そっか。それは残念だったな」

「うん」

俺はそこで女の子が泣き止むまで待っていた。
もう学校には完璧に遅刻だがなんとなく悔いはない。

10分ほどしようやく落ち着いた雰囲気を見せる女の子に俺は本題を切り出す。

「とりあえず学校に行かないとな。君のお姉さんも心配してるだろうしさ。俺の勘が正しければ10分ぐらいのはずだ」

「そうだね。いつまでもここにいちや駄目だもん。でも、どうしよう」

「ん？何が？」

「……傘。壊れたから」

「あ、そうか」

そうだったな

なら、考えよう。

今ここにいる人間は2人。

傘は今俺の手にあるサンダーのみ。

でもこの傘ちよっと小さいので2人入るのはちよっと厳しい。

……、

Q1:…この場合どうすればいいでしょうか？

A1:男は度胸！！女の子に傘を託し学校までダッシュ。（道中不

明確)

A2：現実是非常である。女の子を置いてく。

A3：ドキドキ！！狭い傘で女の子とラブラブ相合傘イベント発動！！肩とかぶつかっちゃうぞ？

……いやいや2はねーって。それは男として駄目だろ。

俺的はやはり3だがこれも無理があるし普通初対面の男子と相合傘なんてやらないだろう。なんとなくこの子に嫌われたくないし。却下。

ここはやはり王道で1か。いやしかし俺はまだ完全に学校まで道を把握していない。下手をすれば明日熱でぶっ倒れるかも。

もうずぶ濡れであるからもう手遅れかもしれないけど、

「ど、どうしたの？頭痛いの？」

「俺は今人生の選択に迫られている。ああでもやつぱり3番がいいな」

「…さんばん？」

俺は虚ろな目でこっちを覗き込む女の子を見る。

と、そこであることに気が付いた。

さきほどまでこの子も雨の立ち往生していた所為であちこち濡れている。

もっと言うと濡れたセーラー服が半端透明になっていて中のモノがうつすら見えていた。

さらに具体的に言うところ……、ピンク色のブラが服を好かしてうつすらと俺の瞳の中に入っていた。

「つつ！？！？！？」

「ひゃう！？な、何！？！？」

無理無理無理無理！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

!!!!!!

こんな状態の子と一緒に歩いたら俺の精神がどうかなっちゃう!!!

肩なんてぶつかったらいろいろぶつきれてしまうって……!!!!!!!!?!

! ? ! ? ! ?

それはまずい。俺の保身とかいろいろやばい。転校初日で犯罪行為とか何様だよ!!!!!!!!!!!!

腹をくくろ。

「……サンダー。後は任せた。俺に代わってこの子を守ってやってくれ」

俺は相棒に語りかける（傘だけど）

それでサンダーは小さく頷いたような気がした（傘だけど）

そつと俺は女の子の小さくて柔らかい手に優しく傘を握らせる。

「え？」

「いいか、君はこの傘を持って学校に行くんだ。まだ1時間目ぐらいだからまだなんともなる。わかったかい？」

もう雨水を吸った制服が重たくってしょうがない。

足元滑るし体中はブルブル震えてる。

別に際立てて運動神経がいいわけじゃないからいい加減疲れてきた。だが今の俺には微塵の後悔もない。

だって今の俺。間違いなくっこいいし。

今になって思えばあの子どもこの学校の通ってるのかな？とかなんて名前なんだろうとか。いろいろ聞いておけばよかった。

もう一生会わないかもしれないけど、できればもう1度ぐらい話したいな！。

ザアアアーーーー！！！！と嵐のような豪雨が刺さる中で俺はそんな思いを原動力にし学校までの道のりを全力疾走した。

まあ、今走ってるこの道が正しいかどうかかわからないけど。

「くっそおおーーーー！！！！！！！！！！」

それでも俺は走ることをやめない。

とある男子の転校初日（後書き）

新しく『らきすた』の小説を書くこととなりました鳳です。
まだまだ先駆者にはおよびもつかないですががんばって続けて行こうと思いますのでよろしくおねがいします。

とある学園の委員長

目が覚めると、正面に真つ白な光景が広がった。

「…う、…俺、何したんだっけ…、」

頭がぼんやりとする。

俺、どうなったんだ？

のっそりと俺は上半身だけ起き上がった。

周りはベットも天井は床もカーテンも白一色。

そして微かに鼻につく薬品の香り…。

「あ、気が付きましたか？お体の具合はいかがですか？」

「…え？あなたは…、」

「申し送れました。私、陵校学園の保険室の管理を担当してます。

天原ふゆきと申します。よろしく願いしますね転校生の遠野さん」

「あ、俺の名前、どうして」

「ふふ、先に謝っておきます。学校では見かけない生徒だったのでちょっとだけ鞆の中を点検させてもらいました。お気に触ったらいめんなさい」

「いやいやそんな！？俺の方こそ、助けていただいてありがとうございます。御座いました。して、一体俺はどうなったんです？」

なんとなく学校についたまでは覚えていたんだがそこから先の記憶がハサミで切られたように断絶していた。

「驚きましたよ。大雨の中校門で倒れていたんですから。微熱もあったので病院に行く前にここで様子を伺っていたんです」

「あ」

そうか。思い出したぞ。

あの後、結局道に迷って学校に着いたのが30分後ぐらいだったんだよな。

それでやっとたどり着いた安心感でついフラッとバタンキューしてしまったんだ。

あれ？

「俺びしょ濡れだったのに、制服は……、ってあれ！？これ何ですか？」

「それは予備の体操服です。あのまま寝かせたら遠野さんが肺炎になってしまうので勝手ながら着替えさせました」

「……誰がしたんですか？」

「……？私ですよ」

「天原先生が俺を着替えさせてくれたんですか？」

「はい。後体のほうも濡れていたので少々タオルで拭きましたが」

「よっ、気が付いたか。具合はどうや?」

「はい。えっと、その、……天原先生?」

「……?ああ、そうでしたね。まだ遠野さんは担任に会っていませんから。こちらは黒井ななこ先生。これからはあなたの担任教師になる人ですよ」

「そういうことや。これからよろしゅうな」

「なるへそ。俺、遠野湊っていいます。これから1年よろしく願います!」

「うんうん。すっかり元気になったな。良かった良かった。校門で見つけたときは顔面蒼白でさすがにちよっと焦ったわ。そういえばなんで自分傘持っていないんや?」

「あれは、……まあ、運命ってやつですよ」

傘……、元気かな。
サンダー

「はあ?なんやそれ?」

「なんでもないっす。それで、これから俺どうすればいいでしょうか?このまま教室に直行ですか?」

「いんや、下校」

「は?」

「遠野。時間見てみい」

時間？と言われは俺は立て掛けてあるアナログの丸い時計に見る。
時計の針は丁度おやつの時間ぴったしに止まっていた。

「つてもう3時かよ！！どんだけ寝てたの俺！？」

「そういうことや、もう授業は終わつとるで、どうする？なんやつたら私が車で送っていつてもいいで？」

「いえ、それは大丈夫です。せつかく来たんだし、ちょっと校舎も見たいですから」

「体には気をつけてくださいね」

「そつか。まだ雨降ってるさかいな。職員室行ったらレンタルで傘借りられるから帰る時よつてき。生徒証は持つてるやろ」

「大丈夫です。いろいろありがとうございました」

「いえいえ、これからも体調は悪い時はいつでもいらしてください」

「困ったことあつたら何でも相談しいや」

俺はこれから長くお世話になる2人にお礼をして保健室を後にする。
まだ若干体は火照っているが歩く分には問題ない。

廊下にはまだ学校に残っている生徒や文化部の部員でまだその賑わいを失っていないかった。

あれ？この女子の制服ってどっかで見たような。まあいつか。

「うわ、やっぱり滅茶苦茶広いなこの学校。同じ私立でもここまで違うのか…」

俺が前いた高校は全寮制だった。前の学校は校舎は全然誰も掃除しなくて荒れ放題だったのに寮だけは妙に綺麗だったのが印象だったな。

1階をあちこち回ってみた。

保健室、職員室、校長室、生徒指導室、進路指導室、あとは化学実験室とかデッサン室なんてのもあった。

1年が4階でそこから順に2年、3年と階が下がっていくらしい。まだ3年には関係ないので先に2年生の集まる3階を目指した。

その途中、階段にて、

「うわぁっと！？何だ、」

「きゃぁぁっ！？」

丁度角を回った瞬間に俺は大量のノートの束がぶつかった。

誰かが運んでいたらしく俺の丁度正面で大量のノートの束に覆われりんごの模様が入ったパンツを見せながら尻餅をついている。

「痛てっ、何だまたノートが落ちてきた、これって名前……柊つかさ？」

「痛たた、すみません前方不注意で、あの、お怪我はありませんか？」

「大丈夫です。そちらこそ」

ぶつかってきたのは女子にしては背の高いめがねを掛けたOLみた
いな人だった。

「というか、滅茶苦茶綺麗…。」

思いつき見惚れてしまいそうなほど可愛い、というか綺麗な人だ。
巨乳だし、

上級生だろうか？

「ああ、大事なノートが…」

「俺も手伝います。ぶつかった俺にも責任あるし」

「すみません。ありがとうございます」

すたすたと俺達はちらばったノートを拾い集めた。

「本当にありがとうございます。手持ち無沙汰ですが後では是非お
礼をさせてください」

「いいって、それよりずいぶん多いんですね。半分持ちましょう
か？」

「そこまでしてもらっわけに…」

「職員室ですよ。なら俺も用事あるんでついできて、如何ですか？」

「…ありがとうございます。じゃあよろしく願いしますね」

こちらこそだ。

こんな美人と並んで歩けるなら鐘でも鉛でも何でも持ってやる。

1階の職員室にて俺はタバコを啜えた白衣の女教師に傘を借りさっきの女子は別の教師のものと思われる机にまとめてノートを置いていた。

「大変助かりました。このあとよければお時間をいただけないでしょうか？」

「喜んで!!」

勿論行く!!用事があっても行く!!

お礼、というのはとても学生らしく体育館の向かう途中にある自販機でジュースを奢ってもらったことだった。

まだ雨は降り続けているが自販機とベンチの場所にはきちんと屋根があった。

俺達はベンチにゆっくり腰を下ろす。

「申し送れました。私委員長の高良みゆきと申します」

「高良さんか。俺は遠野湊です。3年生の方ですか？」

……あれ？高良さんなんか落ち込んでる？

「……いいえ、まだ2年生です。あの、私って…そんなに老けて見えませんか？……」

「あ、いやいやいや違いますよ！！だってすごく綺麗だし俺見惚れちゃって、こう大人の雰囲気って言うんですかね。自分とは全然違うって言うか」

おっぱいも大きいしな。

「そ、そうですか？少し照れますね」

「照れた顔もグッドです！！俺が保障します。高良さんはその顔で人を殺せますよ」

「それは、ちょっと遠慮したいです。遠野さんも2年生ですか？」

「はい。正確には『今日』から2年生になるはずだったんですけど」

「……？」

「俺、実は今日から転校してきたんです。でもちょっとトラブって今の今まで保険室で寝てたんですよ」

俺の言葉に高良さんはすごく驚いた表情を見せた。そしてその後すぐにくすくすと笑う。

「え？俺なんかおかしいなと言いました？」

「あ、いえいえ、気にしないで下さい。じゃあ私はそろそろ失礼します」

「はい。ジュースご馳走様です」

「ふふ、敬語もよろしいですよ。同い年なんですから」

「それはお互い様です」

「私はこれが地ですから、それでは、これからよろしくお願いしますね。遠野さん」

「はい。じゃなくて……、わかったよ。またな」

あれ、…これから？

なんか高良がおかしなことを言ったような…、気のせい？

俺はそれからもう少し校舎を見て回った後そのまま帰路についた。家に着くと急に脱力感が出てそのままベツトにダイブする。

「はあ、いろいろあったな。今日1日で」

でも、こんな高校生活も悪くない。

ふと俺はまだ中学生だった頃のことを思い出した。

俺はあの時、正確には今もだけどちょっと『普通』とは違う所がある。

1つは靈感。

昔から俺には他人には見えないものが見えていた。

それを指差しても誰も信じてくれないし、逆に気味悪がられたこともあった。

中学生だった頃の俺はそんな体質もあってもクラスで敬遠されていたのだ。

思えば、前の高校でも無意識に他人と距離を置いていた気がする。

そんなちよつと『特殊』な俺だったがそれでもかまわず、むしろ喜んで話を聞いてくれる奴が1人だけ居た。

『へえ、湊君って超能力者なんだ、ね。ちよつとあれやって見てよ。こうビビつと』

『ねえ、君って将来の夢とかあるの？やっぱし幽霊を退治する霊能力者とかかな』

泉こなた。

俺と同じくあの時のクラスの『輪』から外れていた奴。

あいつは今もどこかで電波じみたことをやっているのだろうか。

そういえばあいつに将来の夢を聞かれて俺、なんて言ったっけ？

『うーん、そうだな。心霊学者とかだとリアルで堅苦しいし、霊媒師って袴着て杖もってる年食ったおばあちゃんってイメージがあるし古いしかび臭いし、うん、もつとこう、オブラートに『魔法使い』とかかな』

そつ、確かそんなことを言った気がする。

俺にとっても唯一の幽霊の「相談相手」。

ほら、また女の人がベットの
下から俺の脚を掴んで、

「ひいひいひいひいひいひいひいつつ！？！？！？！」

みんな知ってるか？

幽霊つてすんごくすんごく、怖いんだぞ。

その後俺は夜中まで気絶していたらしい。

とある便所の告白騒動（前書き）

世界はとても広いけど

世間はとっても狭いんだということを俺は、この学校に来て
嫌というほど学んだ。

作：遠野湊

とある便所の告白騒動

眠れなかった。

「ぐぐ、」

結局俺はあのあと自分の部屋が怖くなってしまい居間で電気とテレビをつけっぱなしにしてくつろいでいた。

「深夜のテレビが面白すぎてつい寝るのを忘れてしまっていた……」

なんかずっとテレビ見て『うはははは！……！』とか爆笑していた気がする。

気が付くとすでに朝7時、天気良好。

「よし、行くか」

俺は元気だけが取り得なのだ。

とまあ、ここまではよかったんだけど、

現在12時10分前、俺、ただいま学校到着。

目の前にはこめかみをピクピクさせた俺の新しい担任教師、黒井先生。

「それで？、その後駅でおばあちゃんの落しもん探して、途中で小

学生が道に迷ってたから小学校まで行つて、学校に着く直前で女子中学生が不良に絡まれてたから助けてた所為で遅刻したと」

「すっぴん」

実は昨日散々迷った所為でこの辺りにちよつとだけ詳しくなつたのだ。

「アホかおのれは――――！！！！！！！！！！」

「すみませんでしたー！！！！！！」

キイイイイーン!?!?つてきた!!キイイイイン!?つて?!?!?!?!?!?

俺の新しい担任はかなりアクティブだな。

「ったく、どんだけお人よしやねん。言うとかけど、不良と暴力沙汰になってないやろな？」

「勿論です。俺暴力苦手だし。ひたすらお姫様抱っこで逃げ回りました」

「天下の往来で女子中学生をお姫様抱つてどんな神経してんねん
…、多分その子滅茶苦茶照れてたやろ」

ん、逃げるのに必死だったからそこまで覚えてないな。

「まあええ、とにかく着いてきい。今からクラスに紹介するからな。つってもまだ授業中やけど」

「うつす」

誰もいない静かな廊下を進む俺と先生。

どうしてこう、だだっ広い廊下って誰もいないと不気味になるんだろうな。

学校マジックだ。

先生と丁度3階についた時、突然横から別の男教師が来た。

「黒井先生少しよろしいですか？先生当てに電話が来ていますが…」

「はい？電話？どちらさんですか？」

「くわしくは自分にも……、ただようやくお見合いの相手がどのとか…」

「おや？、先生のように…」

「……すぐ行くんで少しまつとれて言っといってください、あのバカ夫婦…、学校にまで電話掛けんなっちゅうに」

「黒井先生？」

「ああ、遠野は教室の傍で待つといて、まだ授業中やさかいな。さすがに1人で入るのは嫌やろ」

確かに、

「では私も用事があるのでこれで…」

「はい、どうもおおきに」

そうして2人の教師はそくさと自分の用事に行ってしまった。
さて、じゃあ俺は気楽に待つとしようか。

……、

俺の新しい教室となる部屋は廊下からだど先生の声以外何も聞こえない。

この学校の生徒は相当まじめらしい、まあ、進学校だから当然か。
空気に馴染めるかちょっとだけ不安だ。

昨日会った高良もすごく頭良さそうだったしな。委員長とか言ってたっけ。

……、なんだか緊張する。

「うっ、トイレ行きたくなってきた。どんだけキョドってんだ俺は……、」

俺は階段の方を見る。

まだ先生が帰って来る様子はなかった。

「ちょっとだけ……、」

生理現象には逆らえないよね。

……でだ。

「……なんだこれは？」

俺は用を足した後、丁度真後ろにあった大を催す扉を見て愕然とした。

そこはがちりとロックされていて何故かガムテープで張ってある張り紙に『助けてください』と書いてある。

……、

関わらないほうがいいだろうか。

「……とりあえずノックだけ」

コンコンッ

「は、はい？どちらまででしょうか？」

「うわ、ホントに人居たよ！！何？これはもしかしてこの学校の？不思議の一つなのか！？……やばい。これはやばい」

俺は速攻で逃げようとするが、

「あ、待ってください。よろしければ僕の話聞いてもらえないでしょうか？」

「断わる。妖怪と話すつもりはない」

「よ、妖怪じゃないです！！お願いします！！僕の人生が掛かってるんです！！」

「はあ、まあ聞くだけならいいけど」

ああ、俺の中の悪魔が逃げると言っているのに俺の中にもう一人の天使が邪魔をする…。

「ありがとうございます!!」

「……ドアと話すのもあれだしとりあえず出て来いよ。俺だって暇じゃないんだから。なるべく手短に話せ」

「は、はい」

キィ……。という小気味悪い音を立てて出てきたのはどこにでもいるようなフツ面の男子だった。

仮にこいつの名前を男子Aとしよう。

「んで、頼みごとって何？」

「実は…、これを渡してきてほしいんです」

「……何これ？」

手渡されたのは綺麗に包装された手紙サイズの封筒だった。

「ラブレターです」

「…は？」

「これを僕の意中の人に渡してもらいたいんです」

「……………」

……ピリピリピリ

ポイッ

「ああーっ！？なんてことするんですか！！1週間掛けて書いた力作がぁ」

「やかましい！！なんで俺が男の恋の後押しなんぞせにやならん！そんなこと自分の力でなんとかしろ！！」

アホかこいつは、

「できればこんな所にいませんよ！！」

「威張ってんじゃねーよ！！大体こんな時代遅れな方法でなんとかなると思ってるのか？」

「じゃ、じゃあどうしたら、もう彼女のことを思うだけこんなにも胸が苦しくて、授業にも身が入らないし…、僕はどうしたいんですか！！」

だからってトイレに籠るなよ。

………ったく、しょうがない。

ちよっとだけ手ほどきをしてやろう。

「いいか？ラブレターなんてもう全時代の遺産だ。告白つてのは勢いだ。一気にいけ。迷うな。相手に考える隙を与える前に即座に頷かせる。電撃作戦。これにつきる」

「で、でもそんな勇氣、僕には…、」

「大丈夫だ。コンディションはこつちで整えてやる。お前はただ黙って俺の言うことを聞いておけ。わかったか男子A？」

「は、はい」

「よし！じゃあお前は屋上で待ってる。俺がその子を誘導してやる。で、その意中の子の名前はなんていうんだ？」

「…2年D組の柊かがみさんです」

「…ん？柊？」

たしか昨日高良の落としたノートの名前には柊ってあったような。でもかがみなんて名前だったっけ？

…ま、いつか。

「よし、では作戦決行だ！！今日から俺のことは遠野先生と呼べ！
！わかったか？」

「はい！！遠野先生」

よしよし、

てなわけ唐突に俺は男子の告白大作成を決行することになってしまった。

まあ、やる以上は手は抜くまい。

チャイムが鳴ったのは俺がトイレを出たのとほぼ同時だった。

「あれ？黒井先生いないぞ。まだ用事すんでないのか？」

てつきり怒り狂った形相で攻めて来るだろう思ったが、いないならいいで好都合だ。

お昼時であつて廊下にはぞろぞろと生徒で溢れ返っていく。かがみとやらがどんな奴かは知らないが食堂とかに行かれると厄介だ。

俺は即座にD組に向かった。

「あの〜？」

近くにいた適当な生徒に声を掛ける。

「ん？何？」

「このクラスに柊かがみつて人いる？」

「ああ、いるけど、柊〜！お客さん！！」

「えー！！、ちょっと待って」

返事したのは今どき珍しいツインテールの髪型の釣り目な奴だ。あれ？この容姿どつかで…、てこの頃俺そればっかだな。

かがみと呼ばれた少女はお弁当箱を持ってこちらに来た。

「はいはい。何か私に用？」

「話がある。ちょっと付き合ってくれないか？」

「へ？」

「屋上まで、頼む」

「あの、ちょっと、どういうこと？」

向こうは明らかに戸惑っている。

まあ、当然だ。

だが遠慮はしない。

「真剣な話なんだ。10分、いや5分でいい。少しでも俺に君の時間を借してくれないか？」

「えっ！？それって！！……うん、…ちょっとだけなら、いいわよ……」

よしっ！！

というわけで俺はかがみを屋上に連れてきた。

俺がさきに屋上に入ると作戦通り男子Aがカッコチコチに固まって待機していた。

……今更だが、これ大丈夫か？
あいつなんかビビりまくってるし、ちゃんと告げるんだろうな？

「それで、……話って何よ？」

向こうも緊張しているのかさっきから頬を赤らめていて声が弱弱し

い！

「ああごめん、話つてのは俺じゃないんだ」

「え？」

「はい。がんばれ!!」

そそそーと俺は男子Aの背中を押す。

「はひっ！？あ、ああああああああのあのの！？！？！？！？！？」

「何？」

「ほら、固くなるな。深呼吸しろ」

「ひ、い、ひ、い」

「…何なのよ一体」

「柊かがみさん！…ぼ、ぼぼぼ僕と…僕と付き合ってください！！！！」

え

言
っ
た
！
！

よくやったぞ男子A！！

ほら、向こうだって呆然としてるじゃないか!!
これなら…、

「うれしいけど、お断りします」

え？

あれ？

「? ! .. ン ン ン」

「体震えまくりで言葉ガツチガチだし、何より気持ちを感じられない。本当に好きならせめて自分の力だけで言うてほしかったわ」

「そ、そんな……」

「でも嬉しかったのは本当よ。だから、ごめんなさい」

それがかみと呼ばれた少女はゆっくりと頭を下げる。

あゝあ。

さすがに悪いことをしてしまったな。後で存分に愚痴に付き合つてやろう。

「うっ うっ …… うあ あああ ああああ ああああ あああん！！
?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「あ、こちら……！待て……！」

「アンタもよ」

「へ？俺？」

「一体どういつつもり？あんな気弱そうな子に無理矢理告白させて」

「いや、あれはあいつの頼みで…ははは」

「うつさい。言い訳すんな。いちいちヘラヘラしてんじゃないわよ」

ぐあーっ！…この子きっつー！！

「これはもう俺の癖みたいなものだから、気に触ったのならすまん」

「本当よ。……はあ、もういい」

かがみは溜息を吐きながら近くのフェンスにもたれかかる。
その時、

ガチンッ！…という音がしてその場所のフェンスが倒れた。

「えっ！？……きゃああっ！？！？！？」

「危ない！…」

倒れたフェントと一緒にかがみが横倒しになる。
その真下は、固いコンクリートの地面！……！！

パシッ!?

「…あ、……え?」

「はあ…、はあ…、か、間一髪……」

彼女が落ちる寸前になんとか右手を捕らえる。
といったのまだ宙ぶらりんなのに変わりはない。

かがみは子猫のように小さくなって震えていた。

「あ、…あ」

「下を見るな!…!俺を見ろ!…!すぐに引きずり上げてやるから。
ん、…重いっ」

「ちよっ!?!重くないわよ!…!」

「んなこと言ってる場合かよ!…!」

ああもう!…!

俺は力任せにかがみを引っ張り上げる。

その勢いによつてそのまま俺とかがみさんは屋上の地面に背中から
倒れこんだ。

手は繋いだままのかがみさんは俺をクッションにするように倒れて
きた。

「はあ…はあ…、やべえ。マジで冷や汗掻いた」

「ん…あん…」

「生きてるか？」

「だ、大丈夫…、あれ？」

「なら、そろそろ退いてくれ。あんまり……はあ、上に乗られると…いろいろ困る」

「え？…あつ！！」

「ふ」

「その、ありがとう。本当に助かったわ。アンタがいなかったら私どうなってたか」

「いいよ。元は俺が原因だし、こっちこそ無理矢理連れてきてごめん」

「そ、それは……、あれ？私のお弁当……」

「それならさっきフェンスと一緒に真下に落っこちていったぞ」

「嘘！？」

「バカっ！！見ようとすんな。また落ちるぞ！！」

慌てて引き止める。

「ご飯なら食堂にいけばいいじゃないか。どっちにしろあれじゃも

「食べないって」

「うっう… 今日のは自信作だったのに」

「うわっ…、なんかすごい落ちんでるよこの人。」

「……、」

「……、」

「……、」

「ちょっとウチが目を離れた隙にどんだけハードな体験してんねん」

「言葉ありません…」

あの後俺とかがみは黒井先生によって生徒指導部に連れて行かれた。屋上の整備に不備があったとして上はいろいろ立て込んでいるらしい。

しばらくあそこは立ち入り禁止になるだろう。

「柊も、大丈夫やったか？まだ気持ち落ちつかへんか？」

「いえ、大丈夫です…、あとつかさには黙っててください、心配掛けたくないから…」

「……わかった。…今日は2人ともはよう帰り。そんでゆっくり体を休めとき」

「えっ！あの、先生俺の授業は？」

「あんなのことがあって平然と授業に出せるわけないやろ。いいから言うこと聞け。今日は公欠ってことにしとくから。なっ」

「わかりました」

「…了解っす」

そんなこんなで俺の今日の学校は終わった。

あれ？俺全然授業出てなくね？ていうか自分の教室にすら一步も入ってない！！

一体いつになったら俺はきちんと転校できるのだろうか…。

「はぁ……不幸だ」

とある便所の告白騒動（後書き）

いつになったら湊はまともに教室に入れるんでしょうか（笑）

とある柊家の運命再会

今日は土曜日なので学校は休みだ。

俺は起きてからずっと自分の折りたたみ携帯をアドレス張を開いた状態でパカパカ開閉していた。

今画面に映っている番号は『柊かがみ』。

あの後なんとなく『番号交換しない？』と言ったら『別にいいけど』と2つ返事で了承してくれた。

そのこと自体は嬉しいんだけど、同時に複雑なこともある。

「…あのフェンス、ぜったいおかしかった」

昨日起きたとある事件。

あれは今振り返ってみるといろいろ不可解だった。

いくら彼女が持たれかかったって何か細工でもない限りそれだけで壊れるなんて変だ。

俺が見たときもフェンスに特徴があるような破損具合なんかなかったし。

だとしたら…、

「まさか、幽霊の仕業とかじゃないよな？さすがにちょっとやばいかも」

確信となる何かがあるわけじゃない。でも確証がばやっとシルエツトのように浮かんでくる。

長年幽霊を見た本能が、そう言っている気がした。

事が自分だけの問題ならともかく周りに飛び火するのであればさ

すぐに対策を考えなくてはならない。

ブー！、ブー！、ブー！

「電話？」

携帯の待ちつけを見る。

相手は今考えていた『柊かがみ』だった。

電話の内容を大雑把に言うと『昨日の件で私の両親がアンタに顔を合わせてお礼を言いたいんだって、遠野君、今日暇？』であるらしい。

ほかにも集合時間とか持ち物とかいろいろあったけど長いから省く。俺はすぐ仕度して家を出た。

はあ、あんなことがなけりやもっと素直に『女の子の家』に招待されることを喜べたのに…、

鷹ノ宮駅に着くと私服の柊かがみが手招きして待っていた。

「おはよう。昨日の今日でごめんね。あの件のことお父さんとお母さんにだけ話したらどうしてもっていうから」

「いやいや寧ろ俺がありがとうと言いたいね。会って1日で家に招待イベントが来るなんて超ラッキーだし、これ、もしかしてフラグ？」

男子Aにはちょっと申し訳ないけど、

「あ、『あいつ』みたいなこと言うな！…まったく、こっちよ、ついできて」

照れたような呆れてるような複雑そうな表情のかがみの後を歩く。

なるべく『裏』のことは黙って置こう。

気味悪がられても嫌だし、信じてもくれないだろうしな。

大橋を渡っている途中俺はそれとなく話題を吹っかけてみる。

「なあ柊」

「何？」

「俺達つて、友達？」

「はあ？」

「いやさ、昨日のあれでいろいろあつて今日こんな形で再会したじやん？最初はギスギスしたけど今じゃもう普通に会話のキャッチボールできてるし、…これって世間一般で言う友達なのかなーって」

「……まあね。私も正直アンタのこと嫌いだったし、考えてみれば意外よね」

「おたく本当に正直だな。いくら俺でも傷ついて泣いちゃうぞ？…んで、柊はどう？」

「どう…って何がよ」

「だから、俺、友達？」

「…友達、でもいいんじゃない？私もアンタに助けられたし、学校同じだからこれからも会う機会多いだろうし…、そういえばアンタ何組なの？」

頬を赤く向上ながら言うかがみ。

俺は内心でガッツポーズを決めた。

「俺はE組だよ」

まだ教室に入ったこと無いけど、

「へえ、じゃあつかさ達を同じクラスなんだ。でもそれだとなんか長い付き合いになりそうだわ…」

「でも俺はD組がよかったな」

「何で？」

「だってせつかく友達第1号ができたのにクラス違って疎遠なんて寂しいじゃん。俺だって人間なんだからやっぱ1人じゃ生きていけないし、何より侘しい」

「そこは心配する必要なさそうだけど、あそこにはたよりになる委員長がいるし、それに私もアンタのクラスでご飯食べるから」

「何っ！？ひ、柊…」

「あによ？」

「そんなに俺のことが好きなのか……それならそうと早く言ってくれれば」

俺、ちよつとときどき、

「そんなわけないでしょうが……！そっちのクラスに妹と友達がいるからよ」

「照れなくてもわかってるって！さあ、いつでもこの胸にダイブしておいで」

「するかバカ……！」

道中談笑して場を盛り上げる俺。こんな気持ちになったのは久しぶりかもしれない。

一緒に笑い、怒って、悩んで、そしてまた笑いあう。そんな当たり前のことを当たり前にできる中が本当の友達ってやつなのかもな。

柊家、とーちやーく。

なんか小規模な武家屋敷みたいだな。

俺はまず肺に気合を込める。そして開放。

「お邪魔しまーす……！！！！」

「ちよ、どんだけ大きい声だしてんのよ……！」

「何言ってるんだ柊。どんな場合でも初対面の相手にはまず第1印象だろ？ここで嫌われたら俺、一生お前と付き合えねえじゃん」

「付き合うつて！！な、何言ってるの！？」

「いや、友達付き合いのこと言っただけど、ははあん。今そっち関係のこと想像したなー！」

「ち、違っ！！」

ふっふっふ、憂いやつめ。

「ったく、やっぱり私アンタのこと嫌いっ」

「あらあら、なんだか楽しそうね」

奥からなんとも美人な人がお出迎えしてくれた。

おお、綺麗だ。

あの雨の少女といい高良といいこのかがみにさらに美人のお姉さんか。

ここらへんは美人率高くて嬉しいな。

やっぱり転校してきて良かった！！

「いらっしやい。君が遠野湊君？」

「はいっ 遠野湊 17歳 4月1日生まれでクラスはE組出席番号は…、まだ不明です」

「つかさと同じクラスよ」

「へえ、じゃあこれからも2人をよろしくね湊君」

「勿論です。サー」

「こらっ勝手に2人で話を膨らませるな!!」

さあ、上がつてと催促され俺は転校初の女の子の家に紹介イベントを達成した。

お姉さんと一緒にすたすた歩くかがみを呼び止める俺。

「なあ、柊」

「何、まだなにかあるの？」

「俺さ、普段からこんな性格だけど嫌ならなるべく直すようにするからさ、…だから、これから一緒に遊んだりしようぜ」

「……っ！？ か、考えとく！」

その後俺が呼び出されたのは小さな祭壇の置いてある畳の居間だった。

そこに父親っぽいおじさんがいてさっきのお姉さんはその隣に座った。

かがみと俺はテーブルを挟んだ正面にゆっくりと腰を下ろす。

これってなんだか結婚前に彼女の実家に行って『娘さんをください！』っていうドラマであるような場面にそっくりだ。

そんな綺麗な事情じゃないけど、

「すまない母さん、みんなにお茶を入れてきてくれないか？」

「わかりました。少し待っていてください」

あれ？あの人ってお母さんなの！！

わけえなおい。かがみとその『つかさ』って子の2児の母親に見えないな。

「お父さん。つかさと姉さん達は？」

「つかさは今日は神社の門付近の掃除だよ。まつりといのりには僕達のいない間に祭壇の掃除とお祈りをしてると思う」

4児かよ！！すごい柊家

かがみのお母さんからお茶をもらった後、父親さんを咳払いをして言う

「遠野湊君。今回の件は本当はありがとう。親として礼を言つよ。君がいなければ僕達は大事の娘を失ってしまうところだった」

「ええ、私達にできることがあったら何でも言ってちょうだい」

「お父さん、お母さん…」

「そ、そんな大層なことじゃないですよ。そもそもあれは俺には少し責任がありますから、あまり持ち上げれても困ってしまいます。できれば変に壁とか作らないで皆さんが思うような接し方をお願いします。みんなと同列に見てもらえるほうが俺は嬉しいですから」

すっごく照れくさくなってあわてて弁解みたいなこと俺、情けない

っす。

「かがみ、湊君はとても清く、寛大な心を持っているようだね」

「今だけって、普段はおちゃらけててマジメさなんて1mmもないから」

「そ、それを今言うか…」

「事実でしょ」

「ぐふうっ！？お、俺今死んだ。心が死んだぞぉ」

「あらあら、仲がいいこと」

「ほんとだね。湊君。これからもかがみと、妹のつかさとも仲良くしてくれると嬉しいな」

「は、はい。そういえばつかさ…さんっていつのは？」

「つかさは私の双子の妹。もうすぐお昼だからその内帰って来ると思うわよ」

双子なのか。

「ただいまー！！」

「噂をすれば、つかさ帰って来たわね。私お昼用意してくるからかがみ見てきてくれる」

「わかった」

かがみの父親も（ただおとというらしい）もどこかに行ってしまった。
かがみの妹ってどんな子だろうな。

双子っていうからにはやっぱり並ぶとどっちがどっちだかわからなくなったりするのかな。

性格まで似てないといいけど、かがみが2人なんておっかないなんてもんじゃないから。

そんな俺の小さい想像は実物を見た瞬間、木っ端微塵になる。
それは、俺もよく知っている奴だったから、

そう、雨の日、あの転校初日にあった。

「あ」

「え？」

言葉に詰まった。
それぐらい驚いたんだ。

「もしかして、傘の人？」

「あ、ああ」

「あれ？つかさ知ってるの？」

「君だったんだ…、あの傘貸したの。てっきりもう会えないと思ったのに」

あれ？じゃあこのつかさつて子は俺と同じクラスってこと？
それにこの子のノートを持っていた高良ももしかして同じクラス？
ってことはさっきかがみが言っていた頼りになる委員長って…、

「そっか、そういうことだったんだ」

俺はまるで複雑に絡んだ糸が1本引くだけで簡単に解けてしまう錯覚を見た。

「あの時は本当にありがとう！あの傘がなかったら私ずっとあそこで立ちぼうけしてたと思うから。すぐにいなくなっちゃったから名前も聞けなくて、そういえばあの後大丈夫だった？風邪とかひいてない？」

「も、勿論さ！！俺は元気だけが取り得なんだぜ！！」

「よかった。あの人どうしたのかなってずっと考えてから」

実は学校ついた途端ぶっ倒れて保健室で寝てたなんて言えないよな。かがみと違って純粹っぽいし、下手に言うとすげえ傷つきそうだ。

にしてもこの子の笑顔すごくいいね。こうグっ！とくるよ

「俺もよかったよ」

「え、何が？」

「あの一件を最後にもう会うこともないだろうなって思ってたからさ。終じゃあわかりにくいかな。つかさって呼んでもいい？」

「う、うん。いいけど」

「ちょっと」

「ありがとう。俺は遠野湊、一応陵桜の転校生なんだ。今日は昨日にいろいろつかさのお姉さんお世話になったからお礼をしに来ただよ」

「へえ、転校生さんなんだ。あ、じゃあ、あの時って」

「そ、あの日が俺の初投登校日なんだ。まあ結局ごたごたがあつてまで自分の教室に入つたことないんだけど」

「ねえ」

「そつかあ、あつ！　じゃあゆきちゃんが言つてた転校生さんってもしかして遠野君のこと？」

「ゆきちゃん？…まあ多分そうだろうな。担任が黒井先生だった」

「じゃあ一緒にクラスだよお。これからよろしくね」

「おーい」

「ああ、こちらこそだ！　もしかしたらあの雨の日に会つた時も偶然じゃなくて運命だったのかもしれないな。いやー神様も偶にいいことしてくれるよな」

「あはは、そんなこと言われるとなんだか照れくさいよ」

「いいよいいよ。照れた顔も全然OKだ!!」

「もお」

「こらああああああああああ!!!!!!!!!!」

「きゃうつ!?!」「おっと」

放置されてたかがみが切れた。

「びっくりしたあ」

「ホントだぜ。ここは空気呼んで隅っこで大人しくするところだろ
柊」

「うるさい黙れ!!私のいない間につかさにちよつかいかけやがつて。私の許可なく私のつかさに手を出すことは許さないからね!!あとなんでつかさは名前で私は苗字なの!?!」

「じゃあかがみ」

「少しぐらい迷えつ!?!」

「なんだそりゃ!!お前は俺に何を求めてるんだ?」

「う、そ...それは」

ははーん

「ひょっとして構ってくれなくて寂しかったの？」

「ちっ…違っ!？」

「そうなの?ごめんねお姉ちゃん」

「う、ぐう…、つかさにまで言われた」

かがみ、撃沈。

その時、ご飯できたわよー。という母親の声で双子は憂々とし表情でテーブルに向かっていった。

ちなみにこの母親。みきという名前らしい。

さて、いいこといっぱいあったし俺もそろそろお暇するとするか。

「あ、湊君の分も用意してあるわよ。よかったら食べていかない？」

「え？」

何ですと？

「マジですか？」

「マジですよ」

おお、

俺は今日最高に幸せだあ————!!!

「ぜひ！頂きます!!」

あれ？そついは傘^{サンダー}どこに行ったんだ？

……、

まいっか!!

いただきます!!

とある悠久の泉此方

日曜日。

俺は長い間疎遠だったの奴の家の前まで来ていた。

「泉…か」

泉こなた。

中学の頃、靈感の強い体質の所為でクラスからあまりよりつかれなかった俺に堂々と接してきた奴。

アニメとゲームが大好きで、でもお金が無いからハードが買えないって嘆いていたっけ。

今どうしてんだろうな。

結局あの時は俺が全寮制の高校に行ってしまった所為でまるっきり連絡が途絶えた。

どこの高校に進学したのかも知らない。

わざわざ意味もなく会うほどの仲でもなかったから。

あの頃はお互い携帯なんて持っていなかったから連絡手段も限られていたんだ。

今日ここに来たのだって気まぐれだ。

でも、もしかしたら俺は…、

今まであいつと会えなくて寂しかったのかもしれない。

「…はっ、そんなの今更すぎる」

俺は泉と書かれた表札がある家のインターホンは押した。

ピンポン！！

…ガチャ

『はい。泉ですが』

俺は小さく息を吸い込む。そして今彼女に一番言いたいことを言った。

今までなんてただのプロローグ。

ここからが、俺の悠久の物語の本当の始まり。

「なんて重苦しい前置きしておいていきなり『魔法使いのお出ましだー！！』て何さ。一瞬不審者と思って警察に通報するところだったよ」

久々に会ったこなたは呆れていた。

「お前なら伝わるかなーって思ったんだよ。まさかいきなり切られるとは思わなかったさ」

「いや普通切るってあの場面だと、どんな返しを期待してたのさ。
…はい。ここが私の部屋」

久しぶりに招待されるこなたの部屋。

テレビ、パソコン、ゲーム機数台に何かのアニメのフィギュアにポスター。そして本題一杯のマンガ。

…こいつは相も変わらず、というかさらにグレードアップして。

「…引くわー」

「ちよっ！！入るなり失礼なこと言うなー！！」

「あっはっは、ごめんごめん。悪かった」

「まったく。ちよっとお茶入れてくるよ」

「ありがとう。なあ、こなた」

「ん？」

「久しぶり。元気そうで安心した」

「そっちもね」

なくしたパズルのピースがようやく見つかった。そんな不思議な高揚感。

きっと俺は今すごく変な顔してるだろうな。

…それにしてもこなたの父親、そうじろっさんいなくて良かったよ。

俺が中学生の夏ごろに1回だけ会ったけどまさか本当に木刀持って追い回されるとは思わなかったからな。
ん？そういえば、

「こなたの奴全然身長伸びてなかったな。…あれって大丈夫なのか？」

「もしもーし。まるっきり聞こえてるんだけど。そういうことは本人のいないとこでやってねー」

「うおっ！？つい心の声がっ」

ボンッ

オボンで頭を叩かれた。

「はあー、湊君全然変わってないな。1年も経ったんだからちよつとぐらい落ち着いてるかと思ったのに」

「人間が1年程度で変わるかよ。お前だって全くこれっぽっちも変化してねえじゃん。あの頃は『高校生になれば胸だって大きくなる！』なんて豪語してたのにな」

「人が気にしてることを、今は貧乳もステータスなんだよ。そういえば湊君はまだ幽霊に付きまとわれてたりするの？」

「ああ。そこは少しぐらい変わってほしかったな」

こなたが持ってきたポテチ（コンソメ味）をポリポリ食べる。
このこなただけは幽霊体質の俺の世迷言のような発言も引かずに聞

いていた。

俺が『あそこに幽霊がいる！？』って騒いでも他の奴みたく引かず寧ろ『えーっどこどこ！』とか普通に言ってたからなコイツはある意味大物だ。

「そういえば陵桜に転校するって本当？私も一応陵桜の生徒なんだよ？」

「あれ、そなの？」

「そうそう。あの時は卒業までに合否の判定が来なかったから結果が決まったときは湊君もう新しい高校の寮に入ってたと思うよ」

「なるほどな。ならこれからはまた一緒か」

「ちょっと嬉しい。」

「だね。あの頃の騒がしい日々が懐かしいよ」

「俺も。…なあ、こなた」

「何？」

「俺達も、やり直さないか？」

「…は？」

「あの頃みたいになさ。一緒にゲームして遊んだりデート行ったりして、高校が変わった所為で疎遠になっちまったけど俺達はまためぐり合えた。だからまた、輝いていたあの時みたいにな…」

「……………」

一瞬だけ息が詰まったらしいこなた。
俺の気持ちに気付いてくれたのだろうか。

「湊君」

普段は見ないこなたの真剣な顔。そして…、

「もともと存在しない物は取り戻しようがないと思うよ？…っ！
湊君とデートなんかしたことないしフラグも立ってないよ。勝手に
過去を捏造しない！」

「ごめんなさい」

こなたに怒られた。

久しぶりに会った幼馴染に過去の思い出を語ったついでに愛の告白
しよう大作戦！！……失敗。恋愛って難しいな…。
その後こなたと対戦ゲームをして遊んだ。

今しているのはとある格闘ゲーム。

コイツゲームに関しては昔からホント強え。俺の必殺ヘルステイン
ガー（仮名）がまったく通用しないぜ。ああ、技名に関しては突っ
込まないでくれ。中坊だった頃の痛い思い出の1つだ。

「それって端に正座してゲームしてるだけじゃん」

「違う。こうすることによってゲームに対する俺の集中力が25%

アップするんだ」

「微妙だね」

うう、足痺れてきた…。

このヘルステインガー（仮名）の唯一の弱点は持続時間が短いことだな。

しんどくなったので俺は正座をやめ姿勢を崩した。

その瞬間、TVの画面が「YOU WIN!!」と大きく表示される。

「あっ」

「やたー！！また私の勝ち！！まだまだですのう湊さんや？」

「ぐ、ぐぬぬ、おのれ…また腕を上げたようすな。こなた殿」

ことゲームに関しては俺がこなたに買ったのはあらゆるジャンルを合わせても『一度』しかなかった。

でも、個人的にあの勝利は黒歴史だ。

結局その後もこなたにまったく勝利できず疲れたのでまたのんびりしていた。

「よし、これでみさきとのフラグ立ったー！！相変わらずシンデレは攻略するの難しいな。やっとデレたよ」

こなたは絶賛エロゲープレイ中。

：男の前で18禁ゲーやるってどうよ？

昔馴染みとはいえ俺だって男子なんだからそこらへんはもう少し抵抗してほしかったと思う所存。が、まったくお構いなしでヒートアップしていくこなた。

「なあ、こなた」

「ふっふっふ恥ずかしがるでないぞ。すぐに私の虜にして上げるからね」

「おい。こなさんやーい」

「ん、何？」

「…いろいろ言いたいことが増えたが、まあ今はいいや。あの頃お前ってよく『フラグ』って言葉をよく使ってたじゃん。教室の扉の前で男子とぶつかったら『衝突フラグキタコレ。まさか日村君ルート突入！？』とか」

「それで？」

「なんで俺にはフラグって言わないの？こなた的に言うと俺って『地元でたった1人の友達属性』じゃないの？」

「どっちかというと『家が近所の友達属性』がいいけど。湊君にも1回だけ言っただじゃん。でもその時に本気でキスしようとしてくるからやめた」

あれ？そんなことあったっけ？

「俺、そんなことした？」

「覚えてないのかよ！？まったく。湊君はデリカシーって言葉が通じないね。君のそういうことは早めに直したほうがいいよ」

「善処します…」

なんか俺今日こなたに怒られてばかりな気がする。

ふと時計を見るとすでに夕方になろう時間になっていた。

そろそろ帰らなければそうじろっさんと鉢合わせしてしまう。

「俺、そろそろ帰るな」

「はいよー。外まで送ってくね」

こなたにお見送りされ玄関先まで来た。

空は若干雲行きが怪しい。明日は雨かもしれない。

「じゃあ、またこれからよろしくな。あ、電話番号登録するか」

こなたと番号を交換した。

「はい。OKだよ」

「ありがとな。これから毎朝ラブコール入れるからな」

「それは助かるね。この頃ネットゲーのやりすぎで朝は眠く眠くて、なんで登校前の朝ってあんなに短く感じるんだろっね」

あくびをしながら答えるこなた。

「ちゃんと起きれたらまた前みたいに一緒に登校しような」

「ういうい。でも湊君だとフラグにならないからねー。なんで男子と登校してるのにドキドキワクワクがないのかな？」

「それは…、俺に聞かれても心が痛いからやめてください…」

ようするにこいつは俺をあまり異性だと見てないのね。

「はっ！？まさか湊君はとある組織に所属している男装の美人かなにか！？」

「はっはっは。まったくお前は」

ねーよ。

「んじゃ、また明日。起きたら一度連絡するな」

「オッケー。またね」

日曜日の最後のイベントが終わる。

今日はこなたと再会した。

また一緒の学校になった。

俺は人生は今、間違いなく輝いている。

明日も、がんばろう。

とある悠久の泉此方（後書き）

せつかくのこなた再会話なのにだらだろと話こむ感じになってしま
った……orz

とある雨天の登校風景

朝、起きた。

外が妙にうるさいと思い窓から外を覗き込むと昨日の予言通り、ポツポツと小雨が降っている。

エスパー遠野だ。

冷蔵庫に入っていた昨日の晩飯の残りを朝飯として食べた後、俺は机に投げっぱなしにしていた携帯を取り昨日約束したこなたに電話してみた。

ブルルルルル…、

「…出ない」

ブルルルルル…、…ガチャ、

『ふぁーい…、おはようございまーす』

「おはようこなた。まさか今起きたのか？」

『うん。起こしてくれてありがとうね。ふぁぁぁ…、でもまだ眠いよ。学校休みたーい』

コイツよく今まで普通に登校できたな。

「わがまま言うんじゃないやありません。今からお前ん家の前まで行くから、仕度して待ってるよ」

『オツケー。何分ぐらい?』

「5分ありや着くと思う。お前は朝飯食べないからなんとかなるだろ?」

実際、俺とこなたの家は徒歩5分くらいの近場にあった。

『うへえ、もつとゆっくりして行こうよ』

「そうやってだらだらしているとまた俺は教室に入れなくなりそうだから却下。途中でパン買ってやるからがんばれ」

『ういー』

さて、俺も早く仕度しなければ、

そして新調した制服に身を包んだ後、あることに気が付いた。

「あ、今日から夏服着用だった…」

俺は急いでタンスを荒らしたね。

猛ダッシュで泉家に向かうと案の定こなたが玄関先に居て足でカツカツと地面に叩いて怒っていた。

「遅いよ!自分で急げとか言っておいて本人が遅刻ってどういふことなのさっ」

「スマンスマン。今日から衣替えだったのすっかり忘れててな。焦

「ってダンスの中の服全部掘り出してたんだ」

その所為で俺の部屋は今、空き巣もびっくりなぐらい服が散乱しまくっている。

帰ってから片付けなければならぬだろう。

「はあ。こういうのは普通男が待つてゐるものなのに」

「ご機嫌取りも込めて途中にあるコンビニでこなたにサンドイッチを買ってやる。」

雨の中で片手に傘をもつてもう片手にサンドイッチ頬張っている姿は小動物みたいでなんだか微笑ましい。

背も小さいしな。

「ん、何？」

「なんでもない。こなさんは今日も可愛いな。うっ」

「もう、おせじが上手だねみなとさんは」

「はははははははははは！！」

こういうところは俺達、やっぱり似たもの同士なんだな。

陵桜学園最寄の駅に着くと見知った双子の顔ぶれを発見。

「うげ」

「おい。開口一番『うげ』ってなんだ」

「なんでアンタがここに居んのよ」

「おおー、かがみんにつかさじゃん。おはよー」

「おはようこなちゃん。どうしてこなちゃんとかいくんが一緒にいるの？」

そこで俺とこなたはお互いの顔を見た。

… かいって、誰？

「つかさ。かいくんって誰のこと？」

「え？ かいくんはかいくんだよ」

「どう考えても遠野君のことですよ。ここにはつかさの男子の友達
はアンタしかいないから」

「俺がかい君？ 何で？」

意味がわからんぞ。

「遠野君の名前って湊君だよな。みなとって漁港の港って漢字もあるじゃない？ 港って言えば海でしょ。で、その読みを変えて、かい君！ー」

湊 港 海 かいって事か。

やたら変化球できたな。普通わからんぞ。

「なるほどねえ。つかさらしいって言うか。本当に天然萌え属性の塊だね」

「俺は別にいいけど、なんであだ名？」

「それはこの子の癖みたいなものよ。気にしないで、それより何でこなたが遠野君と一緒にいんの？私的にそっちのほうが意味不明なんだけど」

「それはだね…」

かくかくしかじか…、

「中学の時のクラスメイト、なあ…、どおりで似たもの同士なわけだ」

「でも、分かれちゃった友達とまた再会できるなんて、よかったねこなちゃん」

「まあね」

「ひょっとしてこの前にこなたが言ってた『中学の時にすごく仲のいい友達がいたって』っていうのは遠野君のこと？」

「そだよー。よく覚えてたね」

「じゃあ魔法使って…」

…なんかかがみが奇異な視線を俺に向けてきた。

「なんだよ？」

「別に、やっぱり類友だったんだなって思っただけ」

「なんじゃそりゃ？」

姉も妹もそろってよくわからないことを。

学園に着いた俺達は階段前の廊下で再び別れ俺はもう3度目になるであろう職員室に向かった。

教室へ向かうために廊下を歩く俺にふと担任の黒井先生が言う。

「しかし、自分一体何回転校してくんねん」

「はあ、それは俺が一番知りたいことでもあるんですけど、こればかりは運命じゃないでせうか？」

「ウチならそんな面倒な運命なんて懇切丁寧にゴミ袋に包んでダンボールで包装して郵送するわ。もちろん着払いでな」

「うわっ、この人ヒデー！」

でもまあ、気持ちはわからなくもない自分が少しだけ嫌だった。

先週の出来事からてつきりかがみに振られたことで自暴自棄になった男子Aが突貫してきたり、はてまたとつぜん窓際に半透明な少女の霊が写って俺がおお騒ぎしたり、大穴でまた男子トイレで今度は男子Bが現れ『つかささんに告白したいんですけど』なんてイベントがあるかと思っただが得にそんな奇妙奇天烈が起こるわけでもなくかなり普通に俺は自分の教室へとたどり着いてしまった。

…この頃俺の発想がとんでもなく方向にぶっ飛んでるな。

「さ、今度こそクラスメイトとご対面や。遠野覚悟はええか？」

「もちろんっす」

まあその内3人とはもう知り合ってるんだけどね。

正直こうして廊下に立たされるのも2度目なので緊張はなかった。先に教室に入って行った黒井先生がやたら転校生を強調して何か喋っているのだけが以上に気になる。

そしてついに『入ってこいやー』という声で俺はやっと新たなクラスメイトにめぐり合った。

がらがら、と教室の扉を開けた瞬間、中にいた生徒の視線が一斉にこちらに向いた。

うわ、…これちょっと怖い。

教室中からあふれ出る謎の圧力に屈せず俺は教卓の前まで歩く。

「えっと、今年度より陵桜学園の2年に転入してきました。遠野湊です。これから1年の間よろしくお願いします」

ぺこりと俺は頭を下げる。

その瞬間クラス中から拍手が巻き起こる。

「何かわからんこととかあったらクラス委員長に聞けな。ウチの委員長は優秀やから。太鼓判押すで」

「そ、それほどでは」

高良が褒められて照れていた。

黒井先生のお達しにより俺は中心より少し後ろの席に座ることになった。

ちなみに先生には俺とこなたが中学の頃からの知り合いだとは言っていない。

言っていないんだけど。

「いやー、偶然ってあるもんだねえ。これからがんばろーねー」

「…そうだな」

隣の席の主はこなただった。

別に嬉しいからいいんだけどね。

さっぱりわからない1時間目が終了し、俺は久々に再会した高良に会いに向かった。

「よっ、『久しぶり』だな、高良。まさか同じクラスのクラス委員長だとは思わなかったぜ」

「はい。『お久しぶり』です。そうですか？私は事前に転校生が来ることを黒井先生から聞いていましたので遠野君のことは結構前から知っていましたよ。まさか転校前に会うとは思いませんでしたけど」

「あれ？ゆきちゃんとかいくんって知り合いだったの？」

「むむ、そんなフラグ私も聞いてないよ。湊君どついうことなの！？」

「別に邪な関係とかじゃないから、そんな嫉妬なくていいぞ。俺はいつでもお前一筋だからな」

「あーはいはい。みゆきさん。湊君とどこであつたの？」

軽く流された…。

「ふふふ、まあ、秘密ということで、それで、遠野さんは何か分からないことがおありですか？」

「今は別に大丈夫だな。強いて言うならいきなりの勉強についていけないのがちょっと不安だけど」

「だよねー、勉強難しいよね」

「私でよろしければ何でも聞いてください。答えられる範囲でよろしければ何でも答えしますから」

「マジで、じゃあスリーサイズとかは！？」

ボカッ

「痛っ、何するだー！！」

「何でお前が聞いてるんだよ。しかもあの文脈だとまるで俺が聞いてるみたいじゃねえか」

「スリーサイズは、ちょっと…」

「いやいやいや、聞かないから。俺これでも一応紳士目指してるからね。そんな失礼なことはしないよ?」

「平気でキスしようとするくせに」

「泉くん。両手と頭に満タンの水が入ったバケツ持って廊下に立ってなさい。3日ぐらい」

「何故に!?!」

「こなちゃんとかいくんって漫才コンビみたいだね」

「それだけお互いを信頼しているということではないでしょうか? 私もちよつと羨ましいです」

あんまり嬉しくありません…。

そんなこんなしていると2時間目のチャイムが鳴った。

…次回へ続く

とある雨天の登校風景（後書き）

ちよつと短いですが更新します。

これから学校のテスト期間になりますのでもしかすると1、2週間ほど更新が停滞するかもしれません。

とある事件の真相追求・起

思えば、俺は相当恵まれていた。

つかさという女の子に傘を貸したのがすべての始まりだった。

そして翌日は学級委員長であるみゆきと知り合った。

とある男子の告白を手伝う仮定でかがみと初めて顔合わせした。

朝から中学が一緒だったこなたとまた一緒に登校することができた。

俺はとても恵まれていた。モテ期というやつなのかもしれない。

そして、そんな男を他の男子が放置するはずなんてなかった。

お昼休みにそれは起こった。

「だからって、転校初日にクラスの男子生徒から尋問に合うってどういうことなんだと俺は異議を唱えたい」

「やかましいこの駄男!!」

「一遍絞め殺すぞコラ」

「転校生に対して態度きつすぎるだろてめえら!! もっとやさしくするとかねーの?」

『まあまあ、とりあえずここに座ってくれよ。ただいろいろ質問したいことあるだけだから、ほら、転校生にお決まりのヤツあるでしょ?』と言われて誘われたのがそもその発端、

何故か俺こと遠野湊はクラスの男子生徒数人に囲まれていた。

動こうにも両手はイスの後ろで交差され縄跳びの紐できつく絞められている。

転校生にお決まりの質問攻めという名の尋問だった。

こいつらの言い分を要約すると「転校生の分際でクラスの可愛い女子と全員顔見知りとかふざけてるだろてめえ」ってことだ。

まあ、わからなくもない。俺が男子の立場だったら間違いなくキレてるし。

「まあまあ、落ち着きたまえよ諸君、俺はたまたま偶然彼女らと知り合っただけで他意とかそういうのは一切ないから、ね、君達の心配は杞憂だ。わかったらこれを解いてくれ」

ちなみにこなた達は教卓の前にいる。

つかさとみゆきはこうしていいかわからずオロオロしてこなたは面白そうに見物していた。

かがみはいない。

今の現状を先生に見られるといろいろ洒落にならないので男子数人が渋々と感じに手を縛っていた縄跳びの紐を解いた。

「…夜道の背後には気をつけろよ」

「ボソっと言うなよ怖えんだよ!!」

洒落にならん。

「いやあ、中々面白い見世物だったよ」

騒動が治まった途端俺の傍に来るこなた。

「初日からクラスの人気者獲得なんて中々の業物を持つてるね」

「嬉しくないから」

「か、かいくん…大丈夫?」

つられてやってくるつかさとみゆき。

「ちょー大丈夫じゃない…、だからつかさお願い。慰めて?」(涙目)

「え?」

「カットオォー!!」

バシーン!!

こなたがどこからともなくハリセンを取り出し俺のおでこにクリンヒットさせた。

「今ふしだらなことを考えてたね。おでこに書いてあったよ」

「だからって…、物理的に消さなくても、」ガタッ

俺、戦闘不能

「あれ?かいくん。…どうしちゃったの?」

「気にしないでいいよ。湊君は突発的に机に突っ伏してしまう持病

を持つてるんだ。本人も気にしてるみたいだからあんまり深く詮索しないであげて」

「そうなのですか」

「大変だねえ……」

「いやいやねーからそんな持病。こなたに騙されちゃ駄目!!俺はちゃんと健康体だ!!」

「あ、起きた」

まったく

そしてチャイムが鳴る。

次は移動教室らしいのでみんないそいそと自分の席に戻っていった。さあ、俺も準備しよう。

…そして放課後。

「あれ？湊君帰らないの？」

「ちょっと野暮用。俺のことは気にしないでいいよ」

「そっか。じゃあまた明日ね」

あいよ。と手を振り俺は3人を見送った。さて、じゃあ行きますか。

「…やっぱり鍵掛かってるよね」

俺は屋上へ出る扉の前に来た。
あの1件以来ドアには重たそうな錠前の鍵をつけられ入ることが出来なくなっている。

幽霊体質を持っけていてもマンガパワーを持っけているわけではないので俺ではどうすることもできない。
そう、開けることは。

そして来たのが4階の空き教室。

ここ近年地震が多発している影響で元の転落防止対策に加え地震対策を備えており絶対安全の為校舎の壁という壁を覆うようにぶつと
いコンクリの塊がXの文字を積み木を並べたように真っ直ぐ敷かれていた。

それは、ある種アスレチックのジャングルジムみたいで、

「俺、割と運動神経はいいほうなんです」

迷うことなく窓を乗り越え校舎の壁をロッククライミングした。
まだ学校は下校する生徒で溢れているので目撃されることだけは避けたい。

本来なら屋上にもフェンスがあつてこんなことをしても無意味だが
今1箇所だけ外れているので問題ない。

多少冷やひやしたがなんとか屋上まで上りきった。

「…やればできるもんだな」

ちよつとだけ自分が怖い。

ここのフェンスの高さは約2・8m。さらにバカな生徒が登らないようにするためその上に3本の有刺鉄線が横一列に敷かれている。昨日破損したフェンスの両隣のフェンスの前で俺は腰を落とす。

「やっぱり、誰かが細工したとかじゃない」

お互いを固定する為のボルトは新品のようにサビ1つない。新学期に備えて全部交換したのかもしれない。

予想通り、壊れる再になんかが擦れたとか、壊れたような後がまったくなかった。

適当なフェンスを思いっきり蹴ってみる。

だが壊れるどころか衝撃による振動すらない。相当頑丈に出来ていた。

世の中には俺が無知なだけで科学的に証明できることがやまほどある。

でも、だからってそれだけで納得なんてできない。

「これから俺は普通の学園生活をして普通に青春して普通の恋愛をするんだ。なのにこんなわけわからないことでぶっ壊されてたまるか」

その時、つんと手の甲に痛みを感じた。

「痛っ、なんだ。どこかで切ったのかな」

傷口からどくどくと血が垂れてくる。

舐めてもそれは一向に止まる気配はない。

「やば、こんなとこで血なんて地面にこびり付いたらまた騒ぎにな

る。…今日は諦めて撤退するか」

次からは消毒液と絆創膏を持参していこう。
そう決めて再び外枠に張り付き木を下りるように慎重に壁を降りていく。

『わたし……、……所、を乱さないで……』

「……え？」

何今の？

「まさか……」

……気のせいだね？

とある事件の真相追求・起（後書き）

うわぁー！！何が1、2週間だよ！！

滅茶苦茶遅れやがってえー！！

本当に全身全霊すいませんでしたぁー！！orz

とある行間の少女達

湊が屋上にいる同時刻。

先に学校を出たこなた、かがみ、つかさ、みゆきは近所のファミリーレストランにいた。

全員ドリンクバーを頼んだ後、こなたとつかさは他に何も頼まずみゆきはフレンチトーストを食べている。

かがみの前にはハンバーグ定食が鎮座されていた。

「この時間からハンバーグって…。かがみの胃袋には底がないのか
…」

「うるさい。いいでしょ6時間目体育でお腹空いてたんだから」

カロリー計算なぞ知らんとはかりにナイフとフォークで丁寧に切り分けたハンバーグをもりもり食べるかがみ。

このことに後悔するのは数時間ほど後である。

「こなちゃん。かいくんってどういう人なの？」

「ん〜？」

つかさがこなたに言った。

実はみんなこのことが聞きたくてこの場に集まったのだ。
自然とみんなの視線がこなたに集まる。

「どうって言われると、難しいな…」

「なんでよ。中学から一緒だったんでしょ？前にすごく仲のいい友

達がいたって憂い々と話してたじゃん」

「何かまずいことでもあるのですか？」

「それは、別に間違っていないんだけどさ。みんなの言う『仲のいい友達』とはちよーっと違うんだよね。何？みんな湊君のことそんなに気になるの？まさかもうフラグが立ったのか」

「フラグ…？」

「旗ですか？」

「それはFlag（旗）。ちげーから。普通に友達としてよ」

「というか何でかがみ湊君のこと知ってたの？今日1回も教室来なかったよね。駅でもなんか親しげだったし」

「それは…、」

言葉に詰まった。

別にやましいことがあるわけじゃなくて本当に言っではいけないことだった。

屋上での転落事故…。このことは学校一部教師と柊つかさを除く家族。そして湊しか知らされていない。

よく『友達に隠し事は…』などとドラマやマンガでやっているがいくら友達だろうが親友だろうが黙っていたいことはあるのだ。

「なんか学校で湊君のお世話してたらしいよ。それでこの前家に来てたんだ」

黙っていたかがみの代わりにつかさが答えた。

「ほほう…、お世話ねえ…。…何してあげたの？」

「んなエロイ目線で言うな！！別に普通よ普通。あんたが思ってるようなことじゃ断じてない！！」

「えー？」

「何その『こいつ絶対人には言えないことしてるだろ』みたいな目は、別に何にもないから、いい加減そっち方面の話から離れろ！！…ったく、」

「ゆきちゃんはどこで知り合ったの？」

「私は数日前に学校でみんなの提出物を職員室に持って行く途中、偶然ぶつかってしまいまして…。それから職員室まで連れ添ってもらいました」

「おおう、見事に角で食パンを加えた女の子とぶつかるフラグを成しておる。…つかさは？」

「大雨の日に傘を貸してもらったの。でもお礼言おうとしたらそのまますごい勢いでどこかに走って行っちゃって」

「ふむ」

こなたはこの時確信した。

…ああ、女子の前であいつ格好つけたかったんだな。

「その傘はもう返したのですか？」

「…えっと」

言い難そうににモジモジするつかさ。

「実は…、その日の帰りにすごい強風にあつて、我慢できなくて手を離れたらどこかに飛んで行っちゃったの…」

「あれってあいつの傘だったの？」

心当たりがあるらしいかがみは驚愕の表情をする。

「2人しかいないときに謝ろうと思ったんだけどかいくんなんだかあっちこっちに引つ張りだこになってたから、ごめんなさい」

「あー。わかるよその気持ち」

多分そのほかにも気恥ずかしさと男子相手に頭を下げることの恐怖心もあつたのだろうとこなたは勝手に推察する。

「弁償したほうがいいかな。やっぱり」

「気にしないでいいよ。湊君その辺はかなり適当だし、多分つかさに傘を貸したことは覚えていてもどんな傘貸したかまではおぼえてないだろうし」

「お前が言つてどうする。…てか話脱線しすぎ！！私達のことはいいのよ。問題はアンタのことでしょ」

「うつぷ…」

「あいつの馴れ初めの話じゃなくてあいつ自身の話だったでしょ」

「あいつって…お姉ちゃん容赦ないね…」

「まあ、あんまり隠しても良くないよね…」

「…？」

「みんなはさ、幽霊って…信じる？」

「はあ？」

「はい？幽霊ですか」

「おばけ？」

「そ、…湊君ってさ。昔から幽霊が見えるんだって」

『……………』

各人の反応はそれぞれだった。

怪しむ者

考え込む者

怖がる者

誰が誰に該当するから察してほしい。

こなたは3人に湊と会うまで経緯を話した。

最初はクラスで孤立していた彼になんとなく声を掛けた。

今は明るいお調子者だが昔は暗い雰囲気を漂わせ他者を寄り付けさせようとしなかったこと。

何度が構っている内に家が近くだと知り親しくなっていたこと。

「私も最初は信じてなかったんだけどね。初めて湊君が私の家に来たときに何故かすごく怖がったんだよ。『ここなんかいる…』ってさ。んで帰った後新しいデジカメ買ったお父さんがね。記念撮影をしようって言ったの。その時、写ったんだよ。しかも連続で」

「う、写った…って何が」

「ピンぼけしててよくはわからなかったけど人っぽい『何か』。あの時は本気で怖くなってお父さんと一緒にお焚き上げもした。偶然かもしれないけどちょっと不気味でしょ」

「それは、遠野さんに言ったのですか？」

「言っていない。そんなことしたら2度と家に来なくなりそうだったし」

「…う、ううう…」

つかさがガクブルしている。

「たまに授業中でもいきなり立ち上がって叫んだりもするからクラスからも敬遠されてたんだ。確証はないけど友達も私しかいないと思うよ。だから余計がまってしまいたくなかったのかもねえ」

「霊媒師などには相談しなかったのですか？」

「したけど無駄だったらしいよ。今では両親も湊君にあんまり近づきたがらないらしいしね」

「そんなのっ…」

あんまりではないか。

彼には誰も味方がいない。

唯一の肉親である両親からも見向きされない。

…孤独だった。

「全寮制の高校に入学したのは知ってたから自分でなんとかしよう
って思うようになったんだなと思って安心してたけどまさか転校す
るとはねえ…、人生ってわからないもんだよ」

「幽霊か…、わたし達のところでも神社だからそういう話はないこ
ともないけど、神聖な神社では縁起が悪いってことでタブーになっ
てるな」

「うんうん、怖いのは嫌だよ」

「みゆきさんはこういうことに対して何かうんちくないの？」

「うんちく…と言われましても、霊にも様々な種類があつて人霊は
元より背後霊や守護霊、動物のものなど、真夜中の謎の叫び声や座
敷わらしなどありふれたものでしか、それに日本と西洋で幽霊に違
いがありますし、江戸時代などからある真っ白い装束を来た女性の
幽霊などは日本特有ですね」

ちなみにみゆきは幽霊はあまり信じていない。
サンタクロースの真実を知って後悔したように幽霊に関しても叫び

声は強風、座敷わらしは家の木々や貴金属が掠れる音など、数えれば切りがないが、まあ様々な自己解釈をどこにでもあるような自然現象にもみ消されたのである。

ネットの世界はどんな知識も知ることができる膨大な知恵の海であると同時に知らなくてもいいようなことまで知ってしまうパンドラの箱なのだ。

「へえ」

「まあそんな変な体質を持つてる人だけどあんまり気にしないでくれると嬉しいかな。みなさんもあんまり触れたがらないし」

「それはいいけど」

つかさもみゆきの頷いた。

「ねえこなた」

「何？」

「あんたもしかしてあいつのこと、好きなの？」

「え、ええー！？」

「なんとつかさが驚くのよ…」

「別に恋愛感情はないけど、強いて言うなら母性本能かな。なんか道端に捨てたれた寂しいワンコみたいでついつい構っちゃう感じ。見てると危なっかしくてほっとけないんだよね。変態だけど」

「はあ、そうなんですか」

「……………」

なんだかはぐらかされた気がするかがみだかあんまり突っ込んでまた地雷を踏むのも嫌なので深くは追求しなかった。

「数日前、とある某所」

大雨が降った日。

「……」

傘がなくなっている。

永森やまとがそれに気が付いたのが授業も終わった放課後のことだった。

(…最悪、まったくどうしてこんな雨の日に)

得に思いいれがいるわけではないがそれでも自分の所有物が勝手に持っていていかれるのは腹が立つ。

煮えくり返りそんな感情を抑え彼女は冷静に現状を考える。

外…すごい大雨。

男子じゃないのだから濡れて帰るなんて論外だ。

友達と一緒に入れてもらう。

…それもできない。なぜなら時刻はすでに17時を過ぎている。テスト勉強の為に1人で図書室に籠ったのが間違だった。

おかげに彼女が友達と呼べる人間はすべて帰ってしまっていた。

「職員室行つて借りてこよう…」

彼女はもう考えるのはやめた。

いろいろ面倒くさくなってしまったのである。

「あら、永森さん？」

「…先生」

職員室の扉を開けようとすると思計らったように反対側から勝手に開いた。

そして顔を覗かせたのは彼女の担任で、数学の教師でもある人だった。

「こんな時間にどうしたの？あ、もしかしてテスト勉強？」

「えっと…それもありますけど」

これまでの経緯を原稿用紙1行分くらいで説明する。

「そつかあ。それは災難だったわね。…あれ？じゃあもしかしてこの傘って永森さんのヤツじゃない？さっき中庭で拾ったんだけど」

「なんですかその黄色い傘」

「気分転換に窓から表を眺めていたら急に空から降ってきたの。きつと誰かが風で手を離して飛んでっちゃったんだと思うわ。これは永森さんの傘じゃない？」

「違いますよ」

「あら」

「それより傘をお借りしたんですけど」

「ん〜…。じゃあこれは使えばいいんじゃない？」

「は？」

「持ち主もわからないしずっと職員室で保管しててもいずれ処分されてしまうから、なら必要な人につかってもらうのが一番でしょ？」

「……………」

それはそうだが教職員としてその発現はいかななものか…。

…持ち主が出てこなかったら返さなくていい。そう言われ結局落し物の黄色い傘を受け取ってしまった。

こうして因果はより深まっていく…。

とある行間の少女達（後書き）

基本主人公以外は3人称で行きます

とある食堂の激辛調査

えー、皆さんこんにちわ。

昨日より陵桜学園に転校してきました。遠野湊です。

ただいま私は友人の泉こなたを連れ学食にやってまいりました。

理由は勿論お昼ご飯を食べる為ですが、実はもう1つ奇妙な話を耳にしたのです。

曰く、この学校の屋上で自殺した女生徒がいるらしい。

曰く、学食のカレーにはメニューに存在しないランクの辛さがあるらしい。

曰く、午前2時まで学校に居残ると異空間へ迷いこんでしまうらしい。

など、様々の虚言妄言を聞きました私は今一番信憑性がありそうな2番目の噂について調査したいと思った次第です。

それでは調査に赴くメンバーをここに紹介します。

まずは先ほど名前がでた泉こなた。

「なんかおもしろそう」

続いては先日見事に柊かがみに振られたこの人。男子A。

「ええー！！俺もですかあー！？」

今日はこの3人で陵桜学園の謎に迫ります。

「とまあ、前置きはこれぐらいで、こなたちゃんと写真取ったか？」

「おっけーだよ。で、これからどうするの？ここの学食って結構混むんだよ」

「そこらへんは俺がなんとかする。こなたは席の確保を頼む。Aはこなたと一緒に席で待機していきいれ。俺が受付まで言って真偽のほどを確かめてみるから」

「りょーかい」

「あの…、なんで俺まで」

「こまかいことは気にするな。これは前にひどいことしたへのお詫びだとは思ってくれ」

「激しく嫌の予感しかしないんですけど、わかりました」

こうして俺達『陵桜調査団』の初めての仕事が始まった。

…どうでもいいかもしれないが『陵桜調査団』って妙に語呂が悪いな。

もっとうでもいいが今までただの男子Aとなっていたアイツの本名は『七志影』ななしえいらしいぞ
紛らわしいからこれからは男子Aで行くがな。

ここの学食のカレーライスは辛さが1から10まで段階に分けられている。

1辛はレトルトの甘辛レベル。10辛はあまりの辛さにここの生徒から『マグマ』と呼ばれているんだと。

それがどれだけ辛いのかは知らんがまあとにかく『辛い』んだろう。だがしかし！！この学校に非公開のランク『20辛』が存在するのだ。

ちなみに、1辛変わるだけでも辛さは2倍変わる。それが10にもなれば…想像に難くない。

俺はさっそく食券を購入し長蛇の列に並んだ。

「はい次の人」

あ、俺の番か。

食券を渡す動作に合わせて俺は少しだけ身を乗り出しひっそりと耳打ちするように言った。

「20辛で頼む」

「えっ。あ、あの20辛かい！！…正気かい？あの黄金の高みを制した者は今まで1人もいないんだよ。やめておいたほうが…」

「大丈夫だから。お願い！！」

「…わかったよ、ちよいと待っててね」

よっしゃ！！

「はいよ。カレーライスお待ち。扱いにはくれぐれも気をつけな」

なんだか危険物を渡された気分だ。

「ありがとうおばちゃん」

俺は渡されたカレーをマジマジと見た。

見た目は…普通のカレーだ。

だが油断ならない。これこそ数多の激辛マニアを失墜させた魔のカレーライス。

何の準備もなしに手を出せば火傷ではすまないだろう。

こなた達が取ってくれたテーブルに座りまずは持ってきたデジカメで数枚納める。

持ってきたカレーを2人はまじまじと見ていた。

「見た目は…、普通のカレーだね。ゲームだとかこういう場合は大抵トラップなんどけど」

「おいしそうですね」

「じゃあお前が一番バツターな。はい決定」

「ええー！？どうして俺があ」

「美味しそうって今言ったから。大丈夫だって別に食べても死にはしないから。水だっていっぱいあるし。ぐいっと思ってしまえ」

ふっふっふ。

分かりきったことかもしれないがこいつを連れてきたのは毒見をさせるためなのだ。

キャラ的に一番適任だ。

「湊君もはっちゃけたね…」

「人生俯いてるより前見て笑ってるほうが幸せだろ。学生の本分は

サプライズさ」

「なら先生が食べればいいのに」

「まあまあまあ」

俺は別のことで忙しいのだ。

「じゃあ、頂きます」

キター!!

男子Aがのっそりとした速度でスプーンを口元に運んでいく。
こなたも俺も何故かすごく真剣にその様を見ていた。

パクッ

「…ど、どうなの？」

「……………」

「お、おい大丈夫か？…辛かったら吐いてもいいだぞ…？水いるか？」

「…ごくんっ…、うん、ちょっとピリっとなりますけど、結構美味しいですね」

「「……………え？」」

あれ？どういうこと？

こいつ20辛もする極辛カレーをあっさり食べやがった。

おかしいな…。

「湊君。これほんとに噂のカレーなの？」

こなたが疑い目線で俺に問いかける。

「し、試食したわけじゃないからなんともいえないが、でもあのおばちゃん表情からして普通のカレーじゃないはず、…次こなた食べてみる？」

「ええーやだよ。ここ男らしく湊君に譲る。大丈夫。湊君の雄姿は私がきちんとデジカメに納めてあげるから」

逃げるこなた。

でも本当にわからない。

「なあ、本当に辛くないの？」

「辛いことには辛いですけど、取り立てて騒ぐほどではないですよ。先生も1口どうぞ」

む、そこまで言われると興味がわいてきた。

スプーンを受け取り適当にご飯とルーを混ぜる。

それを口元まで持ってきた俺は意を決してパクリを1口で飲み込んだ。

「どう湊君。辛い？」

「……あれ？ホントそんな辛く……」

瞬間、俺の視界が真っ赤に染まった。

「おわあああ f j i e y e ————— ああああ
あ!!!!!!?!!?!!?!!?!!」

熱い！！熱い！！熱い！！熱い！！熱い！！熱い！！
熱い！！熱い！！熱い！！熱い！！熱い！！熱い！！

痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！
 ！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！
 痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！痛い！！

死ぬ！！喉が焼け死ぬ！！

トゲトゲのウニを丸かじりしてトゲというトゲが口と喉で暴れ回る
 かのような状態。

苦しすぎて息ができない。

耐え切れずその場で悶える俺。

「ひ、ひじゅー！ひじゅひよくへえー！！」（み、水！！水をくれえー！！）

「わからないって。水？」

「ひいじゅー！！」
（水ー！！）

こなたが持った水を強引に奪い一気飲みする。
だがこの季節の食堂の冷水は熱中症対策の為滅茶苦茶冷えていた。
結果、

「あああああ d k s f j h e i u r e ! ! ! ! !」

口の中がさらにデンジャラスになり完全にトリップしてしまった。

「うわあ、湊君の口がたらこみたいになってる。そんなに辛かったのか」

「あれえ、別にそうでもなかったんですけど」

のた打ち回る俺を無視して平然とカレーを食べる男子A。

こ、こいつ味覚が狂ってやがる!!

こんな非人道的な道徳心の一切考慮されていない殺人兵器を平然と
!?

「A君。辛くないの?」

「だから普通ですって。よかったら1口どうぞ」

「いや、いい。湊君見てたら大体わかるから…、デジカメで写真を
…、あ、せっかくだし写メもみんなに送ってみよ」

「ふー!!ふー!!ふー!!!!」

「大丈夫ですか?」

「大丈夫なわけあるかー！！真剣に死ぬからと思ったわ！！喉が燃え尽きるところだった。…お前本当に平気なの？」

「ええ、美味しいです」

「……………」

調査結果。

究極の激辛カレーは存在した。

負傷者：俺。

今回のVIP：男子A。（もつぶちぎり）

撮影：泉こなた。

以上。

「あ、メール返ってきた」

かがみ『アホ』

つかさ『そんなカレーあったんだあ。お口大丈夫？』

みゆき『あまり辛いものを食べ過ぎるとお体に触りますよ。何事もほどほどに、です』

「オーマイガ！！」

ちなみに殺人カレーは男子Aが涼しげな顔で完食した。

「あっ！そういえば私お昼何も食べてない！！」

とある少年の温故知新

男子Aが失恋大王改め激辛王子になった日の放課後。

「やつと授業終わったー。こなた。帰ろうぜ」

「ごめん。私今日バイトなんだ。今日は1人で帰って」

「そなの？」

「うん」

へえ。こなたバイトなんてやってんだ…。

何のバイトなんだろう…？

「何やってんの？」

「うん？ただのコスプレ喫茶だけど？」

「……………」

いや、うん、まあわかるけどね。こいつのことだし。

でもそれっていいのか？

こつ、公共良俗とかそんな感じのやつが、

いつものメンバー（NOTこなた）と校門を出て俺はみんなにそれを聞いてみた。

「ああ、私も最初聞いたときはびっくりしたな。でもこなたには逆

にぴったりすぎてその時は何も言えなかったわ」

「あの時は私とお姉ちゃんでごなちゃんがどこでアルバイトしてるのかな〜っていろいろ言ってたよね。本屋とかコンビニとか塾の先生とか」

「本屋とコンビニはわかるが塾の先生って、想像できんぞ。そういうのは高良の領分じゃないか？」

「まあねー」

「そんな、私程度の知識では先生なんてとても…」

「いやあ、十分だと思いますけどね。」

「あ、私はここで失礼いたします。皆さんまた明日お会いしましょう」

「またね〜ゆきちゃん」

「…何処行くんだろう」

「多分あそこよ、ほら」

かがみが指を指した先は、歯科医院だった。

「敗者か…」

「おい。字が違っそ」

「あれ、でもゆきちゃん中に入らないよ？なんか入り口でうろろしてる…」

さつきから入ろうと一歩足を踏み出し、いやしかしとまた後退り右往左往している。

傍から見るとすごい挙動不審な絵面だった。

その内、傍に置いてあった看板にガンッと頭をぶつけた後、顔を真っ赤にしてどこかに走り去っていつてしまった。

…えっと、これって一体俺はどう反応すればいいの？

「……、高良って歯医者苦手？」

「みたい。ゆきちゃんにも苦手なものってあるんだ」

「そりゃ、あるでしょ」

「追いかけていいの？」

「別に行かなくてもいいだろ。人間誰しも立ち入ってほしくない場面の1つや2つや3つや4つ」

「いくつあるんだ…」

星の数ほどです。

と、ちょうど高良が入ろうとした歯科医院の窓際の壁に『臨時スタッフ募集！』と小学生が書いたような雑多なナースが大きく乗せてあるポスターが貼ってあった。

「はあ、アルバイト…か」

「???」

かがみたちを別れさつさと帰路についた俺は自宅に帰るなり机の上にあるノートPCの電源を入れあるサイトを開く。

それはWEB上でも中々大きいアルバイト募集の一覧ページだ。

検索範囲を自宅から学校の範囲+aまで絞り職種は…、飲食とか販売系でいいか。あとは適当に、

検索を掛ける。

数秒待った後PCの小さいディスプレイの画面に様々な募集ページが一覧された。

「おお、結構ある」

みたことあるような店もあればまったく知らない工場のような物まで勢ぞろいだ。

適当に見て行き何か面白そうなところないかな…とマウスをスクロールさせた。

『xカフェ 未経験者歓迎 時給800円 シフト応相談』

…まあ普通だな。

『沢山の仲間と仲良く働ける センイレ 時給780円』

…学生の定番1 でもコンビ二つてのも、なんか違う気がする。

『ホール キッチンスタッフ募集』

…学生の定番2 あっ、でも経験者優遇って書いてある。駄目だこ

りや

『秋葉原 コスプレスタッフ大募集!! 好きなキャラになりきって
楽しく営業 』

…これってまさかこなたの…、いやいや。気のせいだろ。うん。

『路上と一緒にハッスルしませんか? 夜の駅前でレッツエンジョイ
』

…これってバイトなの? てか駅前でなにやるんだよ。

「何かぱつとするようなものがないな」

PCを閉じ退屈になってしまった俺はその身をベットに投げ出した。
スプリングがみょんみょんと跳ねて適度な弾力が俺に安眠を誘う。

…静かだった。

ここは親も全然帰ってこない家。

いつか俺も就職して自分の家をもって嫁さんや子供と暮らす日々が
くるのだろうか。

でも、こんな閑寂とした家庭は嫌だな。

俺にアルバイトの経験はない。だから働くことに一種の憧れはある。
いい加減毎月送られてくる小遣いだけじゃなく自分で食い扶持を稼
げるようになりたい…とか。

……… 本当に?

「違う違う。何自分で自分にもっともらしい言い訳作ってんだ…。
やっぱり俺って寂しがり屋なのかな…」

放課後こなたがバイトをしていると言った時、正直ちょっとだけ動揺した。

自分の知らない間にこなたは少しだけ俺の前を歩いているような気がしたから、

だから焦った。一緒に歩きたい。置いていつてほしくない。

手を引いてもらわなければ自分で進むこともできない幼稚な感情がまだ俺の中に残っていた。

「もう考えるのヤメヤメ！！鬱になってくる…」

バイトの話は一先ず保留！！

別に今すぐ働きたいわけじゃないんだ。

この件は追々考えていけばいいんだ。

よし、気分転換にゲームでもしよう！！

その時、机に置きっぱなしにしていた携帯電話が部屋全体に鳴り響いた。

そして電話を取った約30分後の17時15分。

「…また来てしまった」

俺はかがみからコールを受け再び柊家の玄関前に立っていた。
とりあえずインターホンっと、

ピンポン

たったったった

ガチャ

「あ、やっと来た。ずいぶん遅かったわね」

「俺達別に自転車で10分走ればお互いの家につくほど近場に住んでないし、そりや時間掛かるよ。んで何のようなの？」

「…とりあえず入ってよ。そこで話すからさ」

あの後俺は『とにかく来て！！』の一言で馳せ参じられ（命令形）たのだ。

かがみはばつの悪そうな目で家にUターンした。

ついていく俺。

そのままキッチンに入ったとき、あまりの惨状に俺は思わず玄関に回れ右をしようとしていた。

「じゃ」

「こら、帰るな」

ぐえ、首元を掴むな。首絞まるって、

「あ、あれなんなんだよ！！」

『あれ』を指差す。

日ごろから手入れが行き届いている台所は全体に清潔感を漂わすが、その清潔な台所に明らかにあってはならないものがそこにあった。

土鍋だった。子鍋サイズのやつがテーブルに鎮座している。いや…問題はその中身。

なんだ。あれ？

真っ黒な…炭？

「かがみよお。いくら腹が減ってたとしても炭は食えないと思うぞ。人間は決して食に万能な種ではないんだからさ。お腹壊すぞ」

「ち、違うつつうの！！炭じゃないわよ。あれは米、ご飯よ！！」

「…あれって本当にご飯なの？マジ？ファイナルアンサー？」

「マジよ」

どうみてもお米に見えないし、

常人なら炎たぎるかまどに直接物をぶち込んで取り出した後みたいな真っ黒い焦げた『何か』をご飯とは言わない…と思う。

おかしいもん。ごはんって普通白いでしょ。赤飯とかはちよつと赤っぽいけどさ。

黒なんだよ。真っ黒。RGBが0なんだよ。CMYが全部255になってるんだって。

「とりあえず、何故こうなった。つかさはいないのか？」

「…それは、まあ事情話す前に先こっち来て」

イエス、そのままレッツつかさルーム

気分ルンルンで部屋に入れてもらうとベットに寝込んでいるつかさがいた。

おでこに冷却シールを貼ったつかさは赤い顔でベットに潜っていてうんうんと唸っていた。

俺は自分の中でさっきまで息巻いていた熱が徐所に冷えこんでいた

「つかさどうしたんだ？」

「あ、かいくん？こんばんわ。どうしたの？」

「いや、俺のセリフなんだけど、熱でも出たのか？」

「家についた途端に突然倒れちゃったの。風邪っばかったから私お粥作ってあげようと思ったんだけど…」

「なるほど、それであの暗黒物質^{ダークマター}が」

「最初はお母さんに電話したんだけど出なくてね。姉さん達はどうせ役に立たないし、こなたはバイトでしょ。みゆきも出なかったから、仕方なく…アンタに」

「仕方なく…ね」

俺は別にいいですけどね。

高良は多分今も戦ってるんだろう。歯と…己に、

かがみ曰く役に立たない姉とやらは今どこにいるんだろうか？

つかさの前に前まで来てちょっとだけ冷却シールを剥がさせてもらいおでこに手を当ててみる。ちょっとだけ熱い。

「ふむ、熱かな。測ったのか？」

「う、うん。ちょっと高かった…と思う」

「なんか顔赤いぞ。気分悪いか？間接が痛いとかないか？多分インフルエンザではないと思うけど」

「それは…多分かいくんがいるから」

「何？」

「な、なんでもないよ。あはは、やっぱりあの時かいくんの傘なくしちゃった罰が当たっちゃったのかな？」

「ははっ、かもな。反省しなさい」

「えへへ、ごめんなさい」

「……………ちょっと2人とも、私のこと…忘れてない？」

そんなことはありませんよ？

つかさの部屋から（かがみに）追い出された俺は再び暗黒はびこるキッチンへと足を運んでいた。

とりあえず、暗黒物質は処分しよう。あれは目の保養にも悪い。
というよりこの小奇麗なキッチンにあってはならない。

「で、かがみはお粥が作りたかったんだけどちょーつと些細な、そう…ミジンコぐらいの些細なミスして純白の美しい白米が真っ黒な炭になったと」

「ゲテモノみたいに言うな！…わざとじゃないのよ」

わざとでこんなもん作られたら溜まったもんじゃない。

お粥なんてご飯を水でふやかせばいいだけなのに。何故こうなったんだか。

土鍋にこびりついた真っ黒いお米だったものを丁寧に剥ぎ落としもう一度どんぶり一杯の白米を入れ水を入れる。

適当に味付けして火をつけてっと、これでいいか。

「アンタって料理できるの？」

「まあ、普段親が家にいないから。暇つぶしもかねて作ってたんだ、別に好きとかじゃないけどやってる内にだんだんレパートリーも増えてきたな」

「…そう、なんだ」

「??」

なんだ？いきなりしんみりしちゃって。

「できたぞ」

「え、何？」

「いや、お粥…できたんだけど、どうしたさっきから」

「な…なんでもない！！うん。ささ、早くつかさのとこ行こう！！」

「?……ああ」

変なヤツ。

そして再びつかさルームへ、

「つかさ、どう起きれる？」

「うん、迷惑掛けてごめんね、お姉ちゃん」

「そんなこと気にしないの。ちょっと待って、ふーふー、ほら、あーん」

「あーん」

「美味しい？」

「うん。おいしいよ。…これお姉ちゃんが作ったの？」

「ううん、作ったのは私じゃなくて湊なんだけど…、って何よ2人して豆鉄砲食らったみたいに」

「あ、いや別に、うん。俺はいいけどね」

いきなりファーストネームで呼ばれたからつい、

「そつかあ、やっぱりかがみは俺が大好きだったのか…、唯一愛派だから八方美人は俺の主義じゃないんだがかがみがそんなにいうのなら…」

「違うわ！！…ただつかさとこなたがアンタと仲良さそうにしてて、私だけ置いてけぼりになってそうだから…、それだけよ！！それだ

け、勘違いしないでよね!!」

「テンプレートツンデレライバルキャラ発言。やっぱり……」

「あん？」

「なんでもないっす……」

かがみの目が穏やかじゃなくなってきたのでそろそろ自重しよう。
替えの氷枕をかがみに持ってきてもらった後『お大事に』とつかさに告げかがみと一緒に下に下りる。

お役目も終わったのでそろそろ帰ろうと思った。んだけど、

「おかしいな。普通ここで笑顔でさよならするところなのに、何故俺はここで晩飯の仕度をしているんだ……」

俺は再び台所に立ちエプロンを装備してチャーハンを作っていた。

「つ、つかさの看病手伝ってくれたからそのお礼よ。お礼」

「ならかがみがご飯作って……、やっぱいいわ」

またあの暗黒物質ダークマターを作られちゃかなわん。

「……わかってるわよ。私が料理へたつことぐらい。これでも練習してるのよ。母さんやつかさにも教わってるのに、でも何故か結果が伴わないだけで」

「それは多分お前の覚え方がどっか変なんだよ。学校の授業と料理の勉強は別物だからな。はいできました」

料理は学校の数学の微分積分を覚えるようなものとは根本から違うのだ。

まあここらへんは知識より経験が物をいうから口頭で言っても多分わからんだろう。

テーブルの上にできたてのチャーハンを置くとかがみは興味深そうにそれを見ていた。

ちなみに実はチャーハンを作る前にレトルトのカレーを作る案があったが早々に却下させてもらった。

もう当分カレーライスは見たくない。

両手を合わせて、頂きます。

「湊って本当に料理できるんだ…、はあ、なんだか惨めな気分」

「まあこれぐらいは片手間でもできるからな。試しにでもやってみればできるって、そっぴゃお前の家族帰ってこないのな」

「親は今日遅くなるっていうのは聞いてるけど姉さん達は知らない。まあどうせそこらへんで合コンとかしてるんじゃない」

「ふん」

まあこういうことに家族が顔だとゴタゴタな展開になること間違いないからいに越したことはないけど（経験談 in 泉家）

「…あ、おいしい…」

「そりゃどうも」

出来前は上々だ。

それからしばらくお互い無言でチャーハンをもくもくと食していた。

……、

「ねえ」

後一口つて瞬間に俺を呼ぶ声がした。

「なんぞや?」

「湊つてさ、その…やっぱりこなたのこと、好きなの?」

「唐突だな。…まあ好きか嫌いかで言えば俺は大好きだと答えるが、それがどうした?」

「……………」

「あ、別に恋愛面だけじゃなくて昔馴染みって面があるから告白したいつてなら俺は全然okですよ」

「……………そ」

ん?…何か今日のかがみ変だな。つかさが倒れて頭ん中いつぱいいっぱいになってるのか。

ひよっとして屋上の件がまだ…。今日は結局激辛カレーやらアルバイトやらでいろいろあったから行かなかったな。

いい加減修繕工事もあるだろうしやるなら急がないと。

皿をまとめて流し台に入れようとしたところでかがみに止められた。

「洗い物は私がやるからいいわよ。さすがに全部湊に任せるのはあれだし」

「お、そうか。なら頼む。……お皿割るなよ?」

「そこまで不器用じゃないわ!」

「…あいよ。じゃあ俺はもう帰るな。親御さんとかさによろしく言っといてくれ」

「え、帰るの?」

「もう20時回ったしあんまり長居すると電車もなくなるだろ。何?寂しい?」

「ばっ!?!…あそう、じゃあばいばい」

淡泊なこと。

つと言つてもなんだかんで玄関先でも着いてきてくれる辺り根は優しいのよね。

食器を洗つてゐる途中に来たかがみは俺がさっきまで使わせてもらつてたエプロンをそのまま着ていた。

…うん、いいね。

俺も将来こんなエプロン着たお嫁さんにご飯を作ってもらいたい。

「…何目をキラキラさせてんのよ…」

「ちょっと将来の人生設計をな…。んじゃ。お邪魔しました。また明日学校でな」

「うん。…今日はその、いろいろありがとう。アンタが電話で出てくれてちよっと嬉しかった…」

「そ、そっか」

「……………うん」

「つかさ。よくなるといいな」

さて、俺もお暇しよう。

そう思つて玄関を出ようとした。…んだけど俺がドアを開ける前にドアの方から勝手に開いた。玄関を挟んだ扉の向こう。そこに立っていたのはなんかやたら（つかさとは違う意味で）顔を真っ赤にしたぱつとみ大学生ぐらいのお姉さんだった。俺には気付いてないのか俺の真横を素通りしようとする。

「たっただいまー！！あゝお腹すいた！！……………ん？」

「え？」

「ま、まつり姉さん…。タイミング悪」

えつと…、どちらさま？

「かつ…！？」

「か？」

「かがみが男を家につれこんだぁー！ー！ー！ー！？！？！？」

おわっ、何だよこの人。急に叫びやがった。

そして明らかに口が酒臭い！！

俺の体内センサー（第6感とも言つ）は今びびつと警告を告げている。

『この場に留まるのはとても危険デス。ヒナン！？ヒナン！？』

己の本能に従った俺はそのままその場で静かに腰を下ろす。
俗に言うクラチングスタートの姿勢だ。

「じゃ、また明日学校で、アデュー」

そのまま俺は全力ダッシュで柊家を後にした。

「あ！？こらぁー！ー！！逃げんなぁー！ー！！ちゃんと弁解していか
ら帰れー！ー！！」

「かがみに彼氏が居たなんて私聞いてないんですけど！！何？どう
いうことぉ！？今日の私の合コンは一体なんだったのよぉー！！私
もお持ち帰りとかされてみたい〜！！」

「私を知るか！！とにかくあいつは彼氏とかじゃない！！それとお
酒臭いからあんまり近寄るなー！！」

「嘘付けー！？誤魔化そうとしてもそんな照れ隠しじゃ私の目は
誤魔化せないんだからぁ。ほゝら素直にお姉ちゃんに白状しなさい
よー！！」

「完全に酔っ払ってるな姉さん。だあもつ。近所迷惑だから早くドア閉めて！？恥ずかしくて死ぬから」

「徹底追求してやるー！？みなさん！！なんとあのつかさより奥手であるうかがみにもついに彼氏にが……！！」（外です）

「だから、いい加減にしるおー……！！」

かがみ。強く生きろよ。

背後の悲惨な光景に俺は最後まで振り返ることはしなかった。

とある少年の温故知新（後書き）

夏休みつていいねえ。暇が多くて、
ああ…バイトしてえ…

とある事件の真相追求・問

……あれ？ここ……どこだ。

真っ白だった。

何も見えない。そこにはいるはずの自分すら視認できない。
でも直感でここは”夢”だと感じた。

じゃあ……なんの夢？

……ここは、多分屋上だ。

でも何もない。空も真っ白。雲が一面に覆われているとかじゃなく
本当に真っ白な用紙で包み込んでいるかのように白一色の書きかけ
の漫画みたいな世界。

上を見えげるとやっぱり太陽もなかった。

フェンス越しに下を見てみるとやっぱりそこも真っ白だった。

……誰かいないのか？

周囲を見渡す。

でもやっぱり何もない。誰も居ない。自分すら見えない。

階下に行く扉に手を掛けてみるとガチャガチャと鍵が掛かっていて
開かない。

八方塞だ。

どうしようかと思案していると俺はあることを思い出した。

よくアニメとか夢が覚めるように自分の頬を抓るやつがある。あれ
をすればこの世界から脱出できるのではないだろうか？

さっそく……、といったところで俺はまた途方にくれた。

顔がないのだ。いや、あるにはあるだろうが”どこにあるかわから

ない”。

思わずその場でへたり込んでしまう。

その時、一瞬だけ自分以外の声が聞こえた。

俺はもう一度全方位をくまなく見渡す。

…そして、見つけた。

丁度背中位置、俺の真後ろに女生徒がいた。

誰かは分らない、まだ転校して間もないのだからしかたないのか
もしれないが、

俺は彼女を見た。でも彼女は俺を見なかった。

俺はその場から立ち上がりその女生徒に声を掛ける。

……どうしたの？

でもやっぱり彼女は俺を無視する。いや、はじめからそこに存在し
ないかのようにここにいる”俺”を見ようとしなかった。

もう一度声を掛ける。でも一緒。彼女は返事もしない。ただその場
で…

何かに絶望したかのように、その場で静かに泣き続けていた。

《反転》

ガンッ！！と痛々しい音が俺の頭から聞こえ思わずその場で勢いよ
く立ち上がってしまった。

「やっと起きたかこのすつとこつとこい。転校して間もない時期
から居眠りとは自分えらい根性すわってんなあ。そんなにウチの授

業はつまらんか？」

俺の目の前には握りこぶしを振寄せた黒井先生が青筋を浮べて立っていた。

あれ？…そつか。今は歴史の授業で黒井先生が担任で…、

……………？

「俺…どうしたんだ？」

もう一度俺の頭に痛々しい音が響いた。というか殴られた。

「目は覚めたか？」

「て…鉄拳制裁は今のご時世はご法度ではないのでしょうか黒井先生…、ていうかめちやくちや痛いです」

「ふん、おかげですっぱり目が覚めたやろ。これにこりたらウチの授業では居眠りしやんことやな」

黒井先生はかつかつと勝者の足音を立てて教卓に戻っていく。
俺は隣の席のこなたにそつと耳打ちするようにボソボソと呟く。

「…なあ、俺一体どうなったの？」

「どうって…、普通に湊君が机に突っ伏してそれをみつけた黒井先生が拳でゴーンって感じ。覚えてないの？」

「ああまったく。…あれえ？俺そんなに寝不足でもなかったんだけど、なんで寝たんだ俺？」

「悪い魔法使いに襲われたんじゃないの？こっ…『ラリホー！』」
って感じに、魔法耐性のないみなさんはそれをもろに受け…」

「そういうことか…、くそう、悪の魔法使いめ…。今度出てきたら
とっちめてやる」

「その前にウチがお前を叩きのめす」

「…え？」

俺の頭に今日3度目のガツンっ！！という今までより痛々しい音が
教室全体に響いた。

「かいくん災難だったねえ。頭痛くない？」

「完全に授業中、しかも黒井先生の授業で居眠りしてた湊の自業自
得だけだな」

休憩時間、

無事復帰したらしいつかさに頭を優しく摩ってもらいながらがみに
罵倒されている俺。

「いやだから、俺は悪い魔法使いに…」

「意味不明な言い訳するな。なんにしろアンタが寝てたことには変
わりないんだから」

「ほんと言葉きついねおたく…」

昨日ちよつと穏やかな感じであれ？これってもしかして俺ちよつと好かれたんじゃない？とか期待感持ったのが間違だった。

やっぱり柊かがみは柊かがみのまんまです。ひよつとして昨日帰っちゃったのまだ根にもってんのかな…。

女の恨みは長続きするらしいし。

「あー…、でも湊君ちよつとだけうなされて気がする。何か悪い夢でも見てたの？」

今思い出しましたと言わんばかりに呟くこなた。

「…見た」

「本当なのですか？」

「どんな夢だったのよ？」

「…屋上にいた。そんでもってなんか辺り一面真っ白でここからどうやって脱出しようかなーっていろいろ考えてただけけどドア開かないし外はなんか白一色で怖かったし、頬とか抓ってみようかと思っただけけど自分の顔すらわかんなくてさ」

「はあ、なんといいですか…。夢というのは自身の真相意識の無自覚なほど深い部分を見ることがあるとは聞きますが…。何か屋上に對して思いいれ、またはトラウマのようなものがあるのですか？」

その言葉に俺はハッとして思わずかがみの方を見た。

…向こうも同じことを考えてたらしくつい同時に視線があっけしきまう。

俺はなんだか気恥ずかしくなっけすぐにそっぽを向いた。

が…こういうことを見逃さないヤツが今目の前にいるのだ。

「むむ…、今のかがみと湊君の意味深な目配せは一体何？…お姉さんに話してみなさい」

「いや、…偶然だよ、偶然。なっ」

「そ…そうよ。アンタが目敏過ぎるだけだって、別に私達の間に関わるめたいことなんてないんだから」

別にそこまで言わなくとも思ったがここで変に反論すると余計ややこしくなるのでスルーした。

「…そうかなー」

「かいくん、それでその後どうなったの？」

「ああ、ええっと…何もすることが出来なくて途方に促れてたら声がしたんだよ。女生徒の声。声がしたほうに振り向いたらなんかずつと泣いててさ。声掛けてもまったく聞いてくれないの。それでどうしたのかと思ってたら黒井先生が俺の頭にゲンコツを見舞って目を覚ました」

大体の経緯はこんな感じだと思う。

正直俺個人としてはあんな光景もあんな生徒も見たことはない。

…ひょっとしてあれは俺が無意識に働いている願望とかそんな類のものかもしれない。

でも…泣いてる女子を渴望する…どういう状況なんですか俺。

『普通』を何にも望む俺は決して何々プレイとかそういう変態要素が体内に存在していることだけは避けたい。

というか男としているる嫌だ。

「…やっぱり湊君は悪い魔法使いに…『マヌーサ！』とか唱えられたんじゃないのかい？君って頭の中身はいろいろファンタジーだしさ」

「まあファンタジーであることは自覚はあるけどそれをこなたにだけは言われたくないぞ。頭に中身で言えばお前の数倍エキサイティングにファンタスティックだろ」

別にオタクに対してあれこれ偏見を持つわけじゃないけど

明らかに周囲と違ってるやつに『君って脳内が愉快なことになってるね』とか言われたくない。

「いやあそれほどでも」

「褒められてないと思うぞ…」

「まあきつと湊君特有の厨二的自意識爆発妄想だね。よくあるよがある。だから気にしなくてもいいよ」

「よ、よくあるんだ…」

「おい馬鹿。そんなんじや純粹なつかさに『かいくんってちょっと変だよ』とか思われちゃうだろ」

「いや十分変だから。もう今の時点で」

「べ、別にかいくんのこと変だなんて思ったことないけど」

「おお、… やっぱりつかさの俺の中の天使だよ。君にはずっとありのままの純粹さを保っていておくれ」

「うん、変だね」

「… あ、あはは」

「ま、まあ遠野さんには遠野さんのよさがありますから。一つに視点からの視野だけで人を判断するのはあまりよくないかと」

結構高良がいい事を言っているがその足はどんどん俺から離れていく。

… ああ、結局どの場所でも俺の立ち位置ってこんなもんか…。

いいもんいいもん、これが俺のジャスティスだ。俺はありのままの俺を貫き通すぜ。

「なんか笑ってるし」

「湊君は称号『俺は変人だ!!』を手に入れた」

「変なナレーション入れんなや!!」

… そして時刻は放課後となった。

さあて、一昨日ぶりに屋上に行こうか。

今日はいろいろと情報も手に入ってるからもしかするかもしれない。

「湊君今日も居残り？マメだねえ」

「おお、今日もマジメな湊さんだ。また明日な」

「かいくんまたね」

「お先に失礼します」

はいばい、と3人を見送る。
備えは万全だ。いざゆかん…。

とおもって教室を出たら何故かがみと鉢合わせた。
何やってんだこいつ？こなたと帰らなかったのか？

「あ…湊」

「おう、さっきこなた達が帰ったと思うんだけど、ひょっとして入
れ違いになったのか？」

「いや…こなたとはついさっき会ったんだけど」

なんだこいつは…あんまりかがみがこう…、モジモジしてるのはキ
ヤラに合わないぞ。

「あんたこそどうしたのよ。こなた達とは帰らなかったみたいだけ
ど、なんかまだ用事あるの？」

「用事つかあ…、興味っていうか、これから屋上に行くんだよ。
ちょっと気になることがありますてな」

「……………」

「かがみ？」

「まさか…あそこに何か居るの？…その、ゆ…幽霊とかさ」

「は？」

「だ、だって！！…アンタ見えるんでしょ？…幽霊とかそういう類のやつ。それで親からも避けられてるって…」

「…なんで」

…この時の俺は少なからず動揺していた。

あれ？俺かがみに自分の事情まったく喋ってないよな？何で知ってるの？

まさか…。

「こなたに聞いたのか？」

「…うん」

「そっか。…かがみが知ってるって事はきつとつかさも高良も知ってるよな。…はあ、あいつは…」

正直言つて俺は今だけちよつとこなたに嫌悪感を抱いた。

知られないに越したことはなかったから。

そうすれば俺は誰から見ても『普通』の人間だったんだから…。

かがみはなんだかばつの悪そうな表情で目を右往左往させていた。

できるなら…かがみ達に拒絶されるのだけは嫌だ。

「俺のこと、不気味に思ったか？」

「そんなことない！！…そりゃあ、最初はちょっと、あれだったけど…別に湊は私達と何も変わらないし、だから、今までどおりでさ…私もまったく全然気にしないから！！ね」

「いや、『ね』って…」

振っておいて言う俺もなんだがそれでいいのだろうか？

いくら俺でも冗談で済むこととシリアスにならない状況はわかる。

俺のとしての心霊現象は本当に冗談ではすまないのだ。

できるなら巻き込みたくない。でもそれならかがみはもうすでに巻き込まれてる可能性もある。

…これから先、一体俺は彼女達にどういう風に接すればいいんだ。

そのまま俺達は1階の食堂に来ていた。

放課後の時間帯でも1時間ぐらひは学食が開いていてご飯を注文できる。

一先ず気持ちを落ち着かせたかった俺は適当にラーメンを注文して席についた。

「ここはメニュー豊富でいいよね、ラーメンだけで塩、醤油、とんこつ、みそと主要な部分を全部抑えてあるし、前の学校ではラーメンって言ったら味の薄い醤油ラーメンしかなかったからさ。ちょっと今感動してるわ」

冗談抜きでこのメニューの豊富さはやばい。

受付カウンターだけで4つもありそれぞれ和食、中華、洋食、その他と選り取り緑。

しかも日替わり定食まであって客が飽きさせない趣向がある。今日はサーモンのムニエルとバナラとチヨコのミックスパフェらしい。前の超激辛カレーといいそこらへんのファミレスに行くぐらいならここで食っていったほうがうまいって自身持って言えるね。

「私は中学の時は食堂なんてなかったし高校の学食って言ったらここしかないからこういうのが当たり前だと思ってわ。やっぱりここってすごいよね」

「すごいなんてもんじゃないって、こんなん普通ありえないし。学校の教材より学食のほうが金入ってるんじゃないかってぐらい豪勢だし。普通ムニエルなんか学校のメニューで出さないだろ。一口食べる?」

「じゃあちよつと…。あ…やっぱりいい。この間のハンバーグの悪夢を思い出してしまっ…」

「??」

「いやな思い出?をリフレインさせたかがみは1人でしょーんとしていた。」

「アンタって本当におぼけとか見える人間なの?…正直私は幽霊とか心霊の類って信じられなくて、でもこなたや湊は嘘をつく理由もないし。どうなの?」

「そうだな。はっきり言って信じないならそれに越したことはないと思う。そんなの見えなくなたって生きるのにはまったく無縁だしあ

つたらあつたで正直邪魔くさいしな。だからかがみは幽霊否定派でいいと思うぞ」

「でも湊には見えるんでしょ？なら私も」

「俺はかがみと違って選択する権利もなかったんだ。中学に上がつてすぐぐらになんかやたらふわふわした白いも靄みたいなのが見えてさ。はじめは目が曇ってんのかなって対して気にしなかったんだけど、どんだんの輪郭がはつきりとわかるようになってから俺は普通じゃないって自覚したんだ。しかも授業中の教室の真ん中で。人の形。それも何か話してるって気付いた時には怖くて所構わず叫んじまって、それ以来俺は学校で孤立無援。友達最後までこなただけだったな」

それが次第にどんどんエスカレートしていつしか俺は疫病神のような扱いを受けることになった。

なんの局かは知らないがいくつかの心霊特集の番組出演されたことがある。

俺はその場体験したことを逐一全部話したが偉そうにイスにふんずりかえっている評論家みたなお偉いさんやタレント達はまったく信じず番組にならないとその話のほとんどをカット。実際に放送された時はまるで新聞の見出しの端っこのほうにちょこっただけ載っているあつてもなくてもどっちでもいいみたいな番組のつなぎ程度のあつかいしか受けなかった。

結果俺は周囲一般から基地外みたいな思われ世間の目を気にする我が両親は俺は遠ざけ結果。今はあの家で一人暮らしも当然の生活を送っていた。

「かがみが屋上で落下にそうになったとき。いつも霊が近くにいろ

変な『感じ』がした。だからそれが本当に幽霊でかがみに危害を加えたのか、それもとただの事故だったのか。俺はそれが知りたいんだよ」

「知ってどうするの？幽霊なんて私達みたいな人間に対処できるものなの？」

「俺だってそこはわからない。今までだってずっと逃げて来たただけだったからな。それに吸血鬼が十字架が苦手とかゾンビは太陽に弱いとか伝承とかでも悪鬼を聖水を振りまいて浄化したみたいな伝説があるじゃん。だからきつと幽霊にだって何かしらの『弱点』があるんじゃないかってさ」

「それとこれとかまったく違う話な気がするんだけど、でも実際に湊はその幽霊を目で見たことないんでしょ。それで大丈夫なの？」

「だからそこは俺にもわからないんだって。それにまったく情報がないわけでもないんだよ」

「え？そんな話聞いたことないけど」

「ああ、俺もほとんど偶然にさ。ここってすげえ広いから早めに校内の地図を頭の中に叩き込んでおこうと思ってその辺ブラブラしてたら上級生がなんか変な話してんだよ」

「何それ？」

「この学校の屋上で死んだ女生徒の話」

「っ！？」

死んだ、と聞いたかがみの表情が一気に強張る。

俺にとつても前の激辛カレーの情報を集めていた途中に得たまったく偶然の情報だった

「どんなこと聞いたの…?」

「5年前くらいにこの学校の屋上で1人の女子が自殺したらしいんだ。いや…自殺っていうのも確かかわからない。そいつってクラスでは結構な人気者で友達も多かったらしいんだけどある日突然死んだって話。その先輩も知り合いのOBに聞いたらしいんだ。原因もまったく不明。ニュースにもならなかったらしい」

「何それ…、どうなってるのよ」

「そのOBも詳しくは知らなかったらしい。何せ教師陣が一切口外しなかったからな」

俺もそれとなく黒井先生や生物を担当している桜庭先生にそれとなく探りを入れてみたりもしたが手ごたえはなし。プロじゃないから嘘をついてるとか挙動が怪しいとかまではよくわからないので深くは踏み込めなかった。

「それでも信憑性を裏付けることが1つ見つかったんだ」

俺は携帯を取り出しあるサイトを開いてかがみに見せた。

「これって、学校ホームページ?どうしてこれが裏づけになるの?」

「この学校でさ。WEBサイトに専用の掲示板があるんだ。ここな

ら生徒の投稿だって自由にできるし何か手がかりがあると思って探ってみた」

「で何かあったの？」

「いんや、何も無い」

「って、じゃあ意味ないじゃん!!」

「違う違う。確かに自殺した生徒の情報は何もなかったさ。でも考えても見ろよ。ネットの掲示板なんてよほど制限に引っかからないかぎり誰でもなんでも書けるんだ。普通自分の通う学校で死人なんてでたら絶対誰かが何かしら書きこむだろ。それが”まったくない”んだぜ。1つも」

「っ!？」

「それにほら、過去ログを見たらさ、ここおかしいだろ」

5年前の記事を検索したログを俺はかがみに見せた。

陵桜の生徒専用の掲示板には自分の学籍番号を入力することでログインができる。

俺はまで転校して間もないので特別に用意されたゲストIDで入ることが出来た。

きつとこのゲストIDも委員会とか生徒会みたいな上を仕切るやつが使う特別なやつだろう。

そこはテストの範囲や今日の学食のメニューなどありふれた記事が1日1回必ずなにかしら投稿されていた。

だが一部、6月下旬から10月に至るまでの数ヶ月の記事が1つも

ない。

そこだけがスcoopで割り貰かれたみたいにはっきりと開いていた。逆に考えればこれは、この空白の数ヶ月の間に書き込まれた記事には学校側に何か不利益があるってこと。

「当然。原因不明で自殺した生徒のいた学校なんて一部のマニアみ
たいな連中以外、普通不気味がつて受験したりしない。当然倍率だ
つてうんと下がるだろうさ」

そんなことがあつては学校側は運営が困難になり最悪廃校になる。
ならばいかなる手段を使つても自分にとつて不利益な情報は削除
しなければならぬ。

これは勘でしかないが多分自殺した女子の両親にも相当多額な金を
だして『このことは一切口外しないでほしい』とか言つたんだろう。

「少なくとも、この6月下旬から10月に掛けての4ヶ月で何かあ
つたんだ。学校側にとつて知られたら困る何かが」

「で、でもそんなこと合つたんなら普通掲示板ごと閉鎖するんじゃないの？それにサイトの履歴は学校が管理してるんだしもしかしたら先生とかが来るかも」

「閉鎖なんかしたら不自然ですつて大きく口外してるようなもんだ。
それこそ当時の学校の集会とかだと暴動とかあつたかもな。だから
合えて一部だけ消したのかもしれない。履歴に関しては多分大丈夫だ。
俺の生徒番号はまで正式にここに登録されてなくてな。このゲスト
IDなら共通IDだからだれが見たのかもわからない。それにもし
分かつたとしても所詮俺の携帯のIPアドレスが漏れる程度だ。探
知はできない。今どきPCとかを逆探知するなんて警察でも容易に
はできないぞ」

「……………」

「だから今しかない。このゲストIDだって多分あと1週間もたないしな。そうしたらもう自由に掲示板は漁れない」

「なんか。…すごいわね。アンタって、最初は頭の悪いアホって思ってたのに、なんか探偵みたいじゃない」

「そのアホ発言はあとで追及するとして…、俺は今から屋上にいつてことの真偽を確かめてくる。かがみはどうする？」

「それは…」

「来ても結果が帰って来るかわからない。空振りになるかもしれない。俺のさっきいった言葉が真実かどうかはつきりしないからな。それに大前提としてその幽霊が俺の前に出てきてくれるかもわからない。もし出てもかがみに見えないだろうし、どうする？」

俺の本音で言わせてもらえばできるならかがみは連れて行きたくない。

マジにどうなるかわからないのだ。前だって偶然とはいえかがみは死にそうになった。

でも、もしかしたらあの場にかがみを連れて行けば何かしらのアクションを期待できるかもしれない。

本音と利益、その2つの間で俺は迷っていた。

「…行く。そんなこと聞いたら私だって気になるし放って何かおけない。それに湊が危ないかもしれないし」

「俺はどつちかというとかがみのほうが危ない気がするんだけど、それはもういいか。じゃあ…いいんだな」

「うん。…私も一緒に行きたい」

「…よっしゃ！じゃあさっそく行くぞ。日が暮れたらやばいからな」

「考えてみたら普通幽霊って夜にでるもんじゃないの？」

「……………ま、まあ多分大丈夫だ。うん。きっと親切な幽霊が案内してくれるって」

「それはそれで嫌だけどな」

俺達は『日常』の路線からはずれた『非日常』に足を踏み出した。結果がでるとは限らない。怪我をするかもしれない。

それでも、俺は『今』と『これから』を楽しく過ごす為に『異物』を排除する。

さあ、ゲームスタートだ。

とある事件の真相追求・問（後書き）

なんか物語が一気にファンタジーになった気がします。がまだ続きます

とある事件の真相追求・急

「昨日ぶりに来た学校の屋上は前より少し殺風景に感じた。
立ち入り禁止になって以来人の来ない屋上は砂埃ひとつなく真っ白な教会を思わせる。」

逆にその不自然なまでの清潔さが返ってこの場所を輪を掛けて不気味にしている気がした。

今の季節にしてはやけに肌寒い感じもよけいそう感じさせているのだろうか。

「大丈夫かがみ？ほら、手貸してやるから。よっと」

「ありがとう…。まさか校舎の壁をよじ登って上がるなんて、一歩間違えたら確実に死んでたわね」

「小言言えるのはまだ余裕のある証拠じゃないか？」

「そうかしら」

「人間本当にきつい状況の時は一言も言葉を発さなくなるからな。
心が荒んでる状況で普通のんきに会話したりしないだろ。それと一緒だ」

俺達は前と同じく学校の壁を駆け上がってきた。

本当は扉の鍵が開いてたらいいなと思ったんだが現実はそう都合よくはいかないわけで…。

後から上がってきたかがみは周囲をぐるっと見ると壁に手をつけるように所在なせげに両手を胸の辺りの近くで空気を押すように動か

す。

「…なんだろう。うまく言えないけど。すごく居心地悪い感じがする…。これがアンタの言う『変な感じ』ってやつなの？」

「ああ。かがみにもわかるのか」

「ちょっとだけね。すごく狭いのよ。呼吸がしにくいつて言うか…。まるで目の前に壁があるみたいなの…。圧迫感を感じる」

かがみの言うことは俺にもはっきりと理解できた。

ようするに、空気淀んでいるのだ。

それはゴミの廃棄場所のような。または汚れている小川など、人間という一種族が存在できない。してはいけないような『壁』を感じてしまう。

だから無意識的に『ここに居てはいけない』と本能がこの空間に拒絶感を漂わす。

俺はある程度慣れたけど始めて経験したかがみにはちょっと気持ち悪いんだろう。

「なんかちよつとした魔法みたいだろ。『魔法使いは人目を避けて魔術を行使しなければならなかったためこうした人払いの結果を設置する』って感じでさ。もしかすると昔に魔術とかを研究してた学者や宗教はこういった現象を調べたり、解析してたのかもな」

そして『使えたらすごい魔術』なんて夢物語が一人歩きしていったんだろう。

いや、そうだった『人間が使う魔術』なんてふざけた子供の願望を大人気なくマジメに研究した結果が、今この世に当たり前のよう存在している『科学』ってやつなのかもしれない。

ゲームなんかだと魔術師っていうのは科学技術を嫌ってるけどその誇りであるう魔術を追求した先にあるものが大嫌いな『科学』なんて皮肉すぎて笑ってしまう。

「あんたって中学の時に『将来の夢は魔法使い』なんて書いたんだっけ。ひよつとしてそれにも何か意味があるの？」

「え…、別に深い意味とかないぞ。ただああいう風に書くのが年相応かなって思っただけで」

「何それ？」

「なんとかこなたを俺に振り向かせたかったんだ。でもどうしていかかわからないからとりあえずあいつの趣味に合うようなことを言えばちよつとは気を引いてくれるかなっていろいろでっちあげたの」

「へえ…。で結果は？」

「ものすごい引かれた…。『うつわ何それ本当にそんなのになりたいの？いくらオタクな私でも現実と2次元の区別ぐらいつけるよ。さすがに将来の夢にそれはないわー』ってな」

「…確かに友達がそんなこと書いてたら相当引くけど”あの”こなたにそこまで言われるのか。ていうかあいつも2次元とリアルの区別あんまりついてないだろ」

かがみはここにいないこなたに突っ込みを入れる。突っ込みの鏡だ。

「それでショックを受けた俺はその日から1週間学校を無断欠席した」

「いや、それショック受けすぎ。アンタそつち方面はてんで弱いのか」

ガラスのハートの遠野湊のあまり思い出したくない黒歴史です。てかなんで俺達こんな寂しい屋上で漫談なんかやってんだ…。

「危うく本来の目的を忘れる所だったぜ。さすが謎の怪奇スポット。何があるかわからねえな。かがみも気をつけるよ。その内背後からパクツと逝かれるかも」

「あら、随分失礼なこと言ってくれるわね。本当にそうしてあげましょうか？」

「え？」

……、今何か、

「何？どうしたの？」

「かがみ。いまなんか聞こえなかった？」

「聞こえてないけど、まさか…。いるの？」

「ふふ、ふふふふふふ…」

聞いた聞いた。確かに今聞こえたよ！！
すごい。この世のものとは思えないくらいおっかない声でなんか言われたよ！！

かがみの言葉に俺は無言で頷く。

自然と体に緊張が走り全身から冷や汗が出る。平行感覚が徐所に失われていくのが感じられる。きっと俺の脚は恐怖でガクガク震えているだろう。

今まで俺はそういう『幽霊』って存在が目の前に出た瞬間、叫ぶか気絶してまともに立ち会ったことなんてなかった。

だが今日は違う。今度は俺のほうから会いに来たんだ。

俺はかがみを背中に隠すように回りこんでから屋上をくまなく見渡す。

「ちょ、本当に出たの!？」

「出たかは分かんけど確かに今なんか聞こえたんだって。おい、さっき喋ったヤツ!! もう1回出て来てくれませんか!」

「なんで敬語!？」

勇ましい気持ちは裏腹にやっぱり心はチキンな俺だった。

「ふふふ、中々潔いわね。気に入ったわ。ようこそジプシー我が神秘の空間へ」

今度こそはつきりと俺の耳を通り抜ける謎の声。

が、まるでステレオ越しに聞いているみたいで音が振動してどこから聞こえてくるかわからない。

俺とかがみは恐怖に取り付かれ自然とその場から後ずさって行く。

「……よ。……」

いた!?

廊下に出る扉の上。給水塔を除くとある意味この場所でもっとも高い所。

そこにまるで下々の人間を見下すようにその『何か』は薄気味悪く微笑んでいる。

半透明な全身でローブのようなものを着込んでおりそのフードの所為で表情が見えない。

だがうつすらと開いた隙間から陵桜の制服っぽいものがちらちらと見えていた。

俺は恐怖に感情を支配されながらも意を決してあそこにいる怪異に話しかける。

「お前が噂になっていた女子生徒の幽霊なのか」

「噂かどうかは知らないけど確かに私はお前達の言うところの幽霊ね」

ふふふ、と面白そうに話す女生徒の幽霊。

「ね、ねえ。そこに何かいるの!？」

『あれ』が見えないかがみはわけの分らない場の奔流に流されっぱなしでヒステリックに叫ぶ。

それを見た幽霊は何か以外そうにかがみを見ていた。

「なんだ。てつきりお前達2人とも『見えている』かと思ったのに、そこのお前だけなのね。ちょっと拍子抜けだわ」

「かがみには何も見えていない。お前が見ているのは多分この学校

でも俺だけだ」

きつとかがみ視点では俺は虚空に向かってひたすら1人言を話す変なやつに移っていることだろう。

本当なら全力で今の状況を説明したいのだが俺も俺で感情が完全に追いついていないわけではなかった。

そして偉そうに肩膝を乗せて座っていた女生徒の幽霊はゆっくりと真っ黒なフードを下ろした。

その顔を真正面から見てしまった俺は今の緊迫した状況にも関わらずつい見惚れてしまった。

男のすべてを魅了してしまうような透き通った瞳。やわらかい絹糸みたいにさらさらな長い長髪。顔の左方につけているリボンが特徴的な『女の子』だった。

これなら確かにクラスの人気者という噂にも納得が行く。

「うわ、べっぴんさんだ」

思わず口に出てしまう俺。

「べっぴん？」

そして相変わらず何もわからないかがみ。

「私の美醜などどうでもよきこと、それよりお前はここに何をしてきたの？」

やや冷やややかな視線を指しながら言う美人の幽霊。

「ねえ湊。一体何がどうなってるのよ。なんか私だけ全然話につい

ていけないんだけど」

そうだ。こつちの問題もあった。

幽霊の声が全く聞こえないかがみにとっては今の状況はただ気味が悪いだけだろう。

屋上の事件の前にこの状況をなんとなしなないといけないかもしれない。

この頭良さそうな美人の幽霊さんはいかにかいい知恵を持っているだろうか。

俺は淡い期待を込めて聞いてみた。

「かがみ。ちょっと待っててくれ。幽霊さんよ。その前にちょっと聞いていいか？」

「敬語」

「は？」

「お前は2年でしょ。もう現役ではないとはいえ元々は私は3年。先輩後輩の関係は弁えなさい」

妙なところで体裁を気にする先輩さまだった。でもなんでこの人俺の学年知ってるんだ？

「じゃあ先輩。1つ聞いてもよろしいですか？」

「何かしら」

「俺達だけ話を進めると隣にいたかがみが退屈で暴れてしまうそうなので何かこう…先輩の姿ががみにも見えるようにとかできないですか？」

「別に暴れないから」

「そう…。なら感応すればいいのではない？」

「かんのう？」

な、なんかえつちい響きだ。感応って…。

「ええ。お前には私の姿が見える。それはお前が”私達”がどういう存在で”何故そこにいるのか”を本能的に理解しているからよ。つまりお前の脳がそれだけ特別ってことね」

「は、はあ…。なんかよくわからんですが、ようするに？」

「その一端をその女子に触れさせてやればいってことよ。生身の人間でも外界からの刺激によつてはある程度私を認識できるんじゃない？異端に触れれば異端に近づくように」

「よくわからんが…つまり俺ががみに触ればいいんですね」

「そ。でもただ触れるだけじゃ駄目。人にも感じやすい場所とそうでない箇所があるから、適当にやっても効果はないわよ」

「じゃあどうすれば」

「はあ…この虚け。1から10まで説明しないとわからないの？…」

ヒントをあげる。人の心というのはどこに宿るのでしょうか？」

「えー」

んな抽象的な。以外とお茶目なのかこの美人の幽霊さんは。

んゝ、心…ハート。普通脳とか心臓とかだよな。

生憎俺はそういう心学は詳しくない。というか普通一介の男子高校生がそんなこと知るはずないだろう。

触ればいいって言うだから頭をや胸部を撫でればいいのか？

ん？…撫でる？

…、ぐふ。ぐふふふふふふ。

「なんか湊が薄気味悪い笑みを浮べてる…。一体何の話をしてるんだ」

「何を想像しているか大体検討はつくけど、このエロ猿が…。でもまあ…きつとその考えは間違っていないわ」

「うむ。つまりだな。俺がかがみのおっぱいを揉めばこの幽霊先輩が見えるらしいんだ」

「勝手におかしな方向に解釈しないでほしいのだけど」

「…それで？そんなこと言って素直に私が『じゃあどうぞ揉んで下さい』って言うと思うの？」

「言ってくれないの？」

「言うわけないでしょうがぁー！！！！！！」

はっはっは、…ですよねー…。

結局は（当たり前前だけど）かがみの頭を触る方向に可決された。

…がっかりなんかしてないぞ？

かがみ的には髪の毛だって触らせたくないらしいがここはなんとか妥協してもらった。

自分の髪と置いてけぼりの空気を天秤に測ったようだ。

当然だがはじめて触った同い年の女子の髪の毛は本当に男子と同じ素材できているのかと疑問に思うぐらい触り心地がいい。それにいい匂いがするし、思わず撫でてしまいそうだ。

「うわっ！？本当にいる！！」

初めて見たであろう幽霊にかがみはびつくりしていた。

なんとなくその姿は初々しくて初めて幽霊を見た俺はこんなんだっただんたろうかと思いに耽ってしまう。

幽霊は予想通りの驚きに愉快なのか意地の悪い微笑を浮べていた。

…絶対この人生前は自分の顔とか金とかを利用して裏でいろいろ悪さをしてきてる人だ。

「本当の本当にいるんだ。幽霊って…、でも…あれ？なんか見えづらいな。まるでテレビの電波が悪い時みたいなぼやけた感じがする。それに目もなんか痛いし」

「それはお前のフォーマットがその男に馴染んでいないからよ。ようは慣れだからすぐに気にならなくなるわ」

「そうなんだ。よかった」

「…存外早く馴染んだわね。なんだかつまらないわ」

「何を期待してたんですかアンタは。それよりそろそろ本題に入っているーい？」

多分滅茶苦茶焦らされてきてると思うんです。

「ああ。そういえばお前達はここに用向きがあったんだわね。いいわ。話してみなさい」

なんだか要約前置きが終わったような朝礼でやっとな校長先生の長話が終わったような気分だ。

ちなみ俺が校長先生の長話は眠ってしまうタイプ。

俺は一度咳払いをした後改めて目の前に存在する幽霊を見上げる。

「じゃあ遠慮なく。…単刀直入に聞きますけど貴方はこの学校の屋上で死んだ幽霊ですか？」

「違うわ」

「うわ…、なんかあっさり否定された」

「ちなみに貴方がこの前転落死しかけた直接的な原因も私にはないわよ。私はただ騒ぎを見に来た野次馬でしかないわ」

「えっ」

「じゃ、じゃあ誰があのフェンスを壊したんだよ!!」

つい語気を荒げてしまう。

が、目の前の幽霊は澄ました顔でそれを受け流す。

そして顎に手を当てながら、

「それは私も目下調査中。ふふふ…、きっと私とお前達の目的はある意味同じね。お前達はここで起こるジンクスを調べたい。私はここに存在する別の怪異に興味がある。結果は違えどやってることは一緒」

「でも噂じゃあクラスでも友達多くて人気者って…」

「質問を返すけど仮に私がクラスで人気者で友達が多いような普通の人間に見えるのかしら？」

「自分で言ってる空しくならない？それって」

「……………」

どうやら墓穴らしい。

というか目の前の明らかに常軌を異した存在に例外なく突っ込めるかがみがすごい。

尊敬ものだ。

「ええい!!そんなことはどうでもいい。とにかくこの現象を解き明かしたいのでしょう。お前達は」

「え…ええ、まあそれは」

「なら、私と手を組まない？」

「手を組むって…具体的に何をどうするんですか？」

「お前、私の贄^{にえ}になりなさい」

「はい？」

「なんだか話がまたよくわからない方向に脱線し始めたぞ。贄^{にえ}ってなんだ？」

「この人知識を他人に聞かせるのが好きなのか聞いてもいないことをペラペラと話すな。」

「別に聞いてて役立ちそうなこともあるからいいんだけど。なんとなく俺はこの人の性格を理解してきたぞ。」

「贄^{にえ}というはつまり共鳴線、お前風に言うなら守護霊のようなものよ。まああれみたいに四六時中憑^よいてるわけじゃないけど、簡単な契約と思えばいいわ」

「うわあなんか胡散臭い…。で、それを俺にすると何かいいこともあるの？」

「勿論。私とお前が繋がれば五感を共有してお互いの見ているものがわかる。当然自分の意思で見えなくすることもできるわ。見た感じお前は普通の人間とはちょっと違うみたいだし、もしかしたら私もお前の力を使って実体化できるかもしれない」

「…拒否権は？」

「そうね。…断わるのなら私の全存在を賭けてお前の恥ずかしい写

真や出来事を町内や学校にばら撒いてあげるけど、それでもいい？」

「そんなことに存在を賭けるな！！」

そもそも幽霊のくせにどうやってそんなことやるんだ。

…でもこの人ならやる気がするな…。意地でも。

てか結局俺には決定権ないじゃん！！

「…はあ、もうこの事件が解決するならなんでもいいですよ」

ああ、… どんどん俺の目指す『普通』から遠ざかっていく気がする。

「なんか、とんでもない展開になってない？…これってこれでいいの？なんか湊がめっちゃくちや落ち込んでるし」

「別にいいんじゃない？きつとこれからコイツの周りは愉快で素敵なことになるでしょうし。退屈はしないわよ」

「ひょっとしてそれが本当の理由なんじゃあ…」

「さあ？ 瑣末なことよ」

そして、今までずっと俺達より高いところにいた少女はふわーっと風船みたいにゆっくりと俺達の前に降下してくる。

なんか幽霊ってすごい便利そう。高度とか自由自在かよ。

完全に俺と目線の高さが同じところまで降りて来た後、俺の胸に手を当てた。当然だけどなんの感触も感じない。

「何してるの？」

「言ったでしょ。契約だって…。今お前のラインと私のラインを繋いでいるの。違う色の糸を1つに結び付けているようなものよ」

「へえ…」

やっぱりよくわかんない。

そうこうしている内に『契約』とやら終わった。

ちよつと気になって胸部を摩ってみる。

…別になにも変わらないな。

ちよつと拍子抜けだ。

「これでお前と私の間に『つながり』ができた。これからしばらくよろしくね」

「は、はあ…。よろしく」

「そ、そういえば私はこの後どうなるの？もしかして幽霊が見えっばなしになるとか…」

「それはないわ。今はコイツが触れているから一時的にラインが形成されているだけ、手から離れれば再び元に戻るわ」

「そつか…、よかった」

…おい。それちよつとひどくねえ？

まあやっぱり見えないことに越したことはないか。

「そついえばさっきから『コイツ』だったり『お前』だったりしてたけど、俺達自己紹介とかしてなかったな」

「あ、そういえばそうね」

「まあ最初はその必要性を感じなかったし、どうでも良かったもの」

「でもこれから必要になるんじゃないの？」

「だな。とりあえず俺は遠野湊。呼び方は好きにしていよいよ。」

「私は柊かがみ。これからよろしくするかどうかわからないけど、一応よろしくね」

「千里朱音。朱音でいいわ。苗字で呼ばれるのは慣れていないから」

それが、俺と彼女が始めてあつた馴れ初めだった。

とある事件の真相追求・急（後書き）

どんどん設定厨になって行ってる気がするよお…

そして新？キャラクター千里朱音

わかる人はわかりますがこれは2ヶ月前に発売した某ブランドのゲーム「Rewrite」のヒロインの1人です。

…最初の断わっておきますが本作品に登場する朱音はRewriteとはまったく無関係です。キャラクターだけ借りた来ただけのまったく違う人物なのでそこら辺はご了承ください。

ちなみに主人公である遠野湊も同作品の主人公をモデルにしていますがこちらもしっかりちがう人物なのです。

本当なら朱音も名前を変えて出そうと思ったのですがキャラの絵が存在しない二次創作において設定だけのキャラクターは想像しにくくと思つて既存のままにしました。

これから湊君は朱音に滅茶苦茶に振り回されていきます

とある現状の状況説明

俺、柊かがみ。

屋上であった不可解な事故を調査しにやってきた俺達はそこで千里^{せんり}朱音^{あかね}という不思議な幽霊少女に出会った。

そして何を唐突に俺はその幽霊さんと『契約』なるものをしてしまい何故か運命共同隊となってしまうのだ。

で、

「くっそお、物陰に隠れてうるちよると、いいわ。すぐに炙り出してあげるから。覚悟しなさい」

「むっふっふう。幽霊さんだかなんだか知らないけどことゲームで私に歯向かおうなんて10万光年早いよ。年季と格の違いをいうものを見せてあげよう。おりゃー」

「ふっ、その程度で私に挑もうなんて。片腹いたいわー!!」

「何っ!!壁を利用した乱反射な銃撃だと!!ぬぬ…。どうやら中々の腕を持っているようだな」

「この程度ではなくってよ?…私の真の実力は」

「何をー!!私だつてえー!!」

何故か俺の守護霊のようなものになっていた幽霊の朱音さんは偶然俺ん家に遊びに来たこなたをFPSで戦っていた。

FPSっていうのはTVとかPCの画面で剣や銃もって自分以外の

敵を殺つちまうゲームのこと。

家に帰るなり突然『お前のノーパソを貸しなさい』とお願めいれいいされ
気付いたら俺のハードディスクが大量のゲームで埋もれていたりも
した。

さつきから音量が大きい所為でドガガガアー!?!?と銃をぶつ放
す音がうるさくてしょうがない。

どうやらこの朱音さん。俺と契約した影響で1日2時間ぐらいなら
実体化ができるようになったらしい。

久しぶりに娯楽に触れたと言ってこなた相手に大人気なくアサルト
ライフルを乱射していた。

「こなた。10万光年は時間じゃなくて距離な」

「それぐらい知っているよ。こういうのはネタとして言ってるだけ。
最近こういう類似した言葉を使うギャグが多いよね」

「服であれギャグであれ流ブーム行は唐突に出来る物よ。その分飽きるの
も早いけどね」

「とか言ってる間に空きあり!!うおりゃあ全段照射!!いえーい
これで私が5勝4敗だね」

「ちっ」

もういい、とばかりにコントローラーを投げ捨てる朱音さん。

「お前がいらん茶々を入れるからこなたに負けたじゃない。罰とし
てコーヒー入れてきて、ブラックでいいわ」

「意味分からん繋げ方だなまた…。負けたのは余所見してた朱音さ

んの所為でしょう」

「そうそう、負け犬の言い訳は見苦しいよ」

「ぐぬう。はいはいわかったわかった。もうどうでもいいから早くコーヒー」

「結局俺が入れるんかい」

この暴虐王女様は…、

俺は適当なコーヒー粉を選んで適当なスプーンで適当な量をすくい適当な温度のポットで適当な量のお湯を入れて適当にかき混ぜたそれを持って自室に戻る。

「持つてきましたよ。…なにしてるの？」

「あ、ほら湊君見てよ。幽霊ってすごい便利じゃない？自分の足で歩かなくていいんだって。しかも疲れないし暑さも寒さも感じないらしいよ」

さっきから大興奮してるこなたの前にはなんかメートル程度の幅を連続でスライドしてる朱音さんがいる。

…ほんとに便利そうだけど傍から見るとすごいシユールだ…。

本人は疲れてないくせに社交辞令のように『ふう』と息継ぎをしている。

実は帰りしなに俺とかがみはこの異常な惨状を目の当たりにしているのだ。

その時にかがみが『なんかあっちこっちに跳ね返るピンボールの玉みたい』と言って朱音さんの表情を凍らせたことは今でも心に残っ

ている。

「幽体になつてゐる時は五感がないから麻酔を打つたみたいになつて何も感じないのよ。…久しぶりに実態になつた所為でまだ体が安定しないわね。なんか体中がむず痒い」

「へえ、じゃあ今は感覚とかあるんだ」

「実体化してゐる時ぐらい歩けばいいじゃないですか」

「嫌よ面倒臭い。ああ…歩く必要がない幽霊の体はすごく便利ね。疲れないし。生きていた頃は部屋から出るのも億劫だったのよ」

この人…絶対引きもこり体質持ちだ。

「別にいいけど、でも外でその体するときには歩いてくださいよ。絶対要らぬ誤解を作りますから、人間がスケートみたいに滑つて歩いてる都市伝説なんて作らないで下さい」

「それは大丈夫よ。外に出ないから」

「……………」

「…駄目だコイツ、早く何とかしないと」

今更ながら俺はこの人を家に招くことに若干の後悔を抱いています…。

あとこなた。その突っ込みはいろいろ駄目だ。

「湊君」

「ん？どしたこなた」

「この千里朱音さんは湊君のおかげでこうやって触れる体を手に入
れてあちこちうろろできるわけだよね」

「…まあ、そういうことになってるな。詳しい概要は俺にもわから
んけど、それで？」

「いや、漫画とかゲームだとかいう『契約』っていうのは大概依
り代側に何かをもらって力を維持してるんだよね。だから今もこう
やってゲームできてるのは湊君が朱音さんに『何か』を捧げている
んじゃないかって思ってる」

「それは…、」

俺も気になっていた。

こういうのは大抵魔力なりMPなりとにかく『普段人間が使ってな
い未知の力』を分け与えるなり行使する事で力が発現する。ペナル
ティなしの力なんて普通はない。

だから、今この状況でも俺は朱音さんに何かを吸収されているのだ
ろうか…。

「そこんとこどうなんですか朱音さん」

餅は餅屋に。これは朱音さんが一番知っているだろう。

「……………え、何？」

「…今わりと真剣な話してるんで取りあえずヘッドホン外してくだ

さい」

「……はあ」

うわっ…超面倒くさそう…。

「で、何？」

「だから、今こうして朱音さんが遊んでる時も俺は朱音さんに何かを捧げているんですかって話だったんですけど」

「その話。それはそうよ当たり前じゃない。何を言ってるのお前は。こんなに便利な力が無制限な訳がないでしょう」

「一番最初に言わんかい！！」

何『そんなの知ってて当たり前』見たいにしれっと言ってるんだ。モノによつては即刻契約破棄も考えるぞ。

「で、俺は何を消費して貴方を支えてるんですか？MP？TP？」

「LP」

「ライフポイント！？」

「イッツア生命だよ湊君！！」

俺ってば自分の寿命使ってこの人支えてるの！？

「ちょっと待て待て！？じゃあなんだ。俺は今のこの状況で徐所に

自分の命をすり減らしてアンタと契約してるのか!!」

「人間誰しも限られたエネルギーを有効活用して個々の人生を送ってるのよ。私はそれをちよつと拝借してるだけ、別に普通じゃない」

「どこのどこが!! ってことは俺短命になっちまじゃん!？」

「誤解してるようだけど私は別にあなたの寿命を奪っているわけではないわ。必要なのは1日のエネルギー。カロリーでもいいわ。あなたのその体1つで2人分のエネルギーを消費しているって話よ」

「…つまり？」

「お前が大食いになる」

「うわーお…」

俺の心の声を変わりに代弁してくれたこなた。

でもそっかぁ。大食いになるんだ俺…。そういえばちよつとお腹空いてきたかも。

確かに今なら大盛りご飯5杯は余裕で行けそうな気がする。お茶碗に3杯目も遠慮しない気迫構えだ。

「この小説は基本コメディ路線で御送りしております」

「こなた。誰に言っているの？」

「テレビの前のみんなさ」

「こなた。メタなこと言っちゃ駄目。いろいろな人に怒られるから」

「てへ」

「????」

うん。世の中には知らないほうがいいこともあるんだよ。

こなたを家に帰し夕飯を食べた後、（きつちり朱音さんもお飯をお食べなさった。必要あるの？）

紅茶を作れとお願いされ俺は2つのティーカップを持って再びマイルームへ。

…そろそろ屋上の件の続きをしよう。

「ジnkス。… 知っている？」

「ジnkス？… 黒猫が横切ると不幸なことが起きるとかそういう類のやつですか？」

ジnkスとは科学的根拠のない言い伝えのようなものである。

『黒猫が横切ると不幸になる』や『ある公園で告白すると必ず成功する』など都合の良かったり悪かったりする迷信の類。

最近になっていくつかは裏づけが取れたものもあるらしいが。

ちなみに黒猫の言い伝えは日本では不幸だがイギリス辺りだと逆に幸せになるらしいのだから胡散臭いことこの上ない。

『この戦いは終わったら俺。結婚するんだ』はジnkスというより死亡フラグ。

「そうよ。民衆が『こうあってくれたら嬉しい』『こうなったら嫌だな』という空想の出来事に尾ひれがついた出鱈目が実体験になっ

てしまったもの。存在しない出来事の通称」

「存在しないって…、いくつかは実際に起きたことじゃないですか」

「それは科学的に裏づけの取れたものよ。例えば『ツバメが低く飛ぶと雨が降る』というジンクスは雨天の時はツバメの餌となる虫が上昇気流が発生しないため低く飛んでいるからツバメもそれに合わせて低空飛行しているだけ。とかね」

確かに、迷信のジンクスの境界は紙一重だが…。

「それと今回の件とどういう関係があるんですか？」

「あそこにも同じものが存在するということよ。確かにジンクスとというのは9割が人間の勝手につけた迷信だけど時にそれは『そういう風に誘導する渦』となるのよ。血液診断などでよくA型は几帳面とかB型がいい加減とか言うでしょ。それは確証のない取ってつけた言葉だけど実際にそれを聞いたお前は思う？」

「どうって…、俺ってそういうやつなんだあて思うでしょうね」

「そうよ。確証はない。けれど絶対に違うという否定材料だって存在しない。だから人間は『自分はそういう風にできている』と勝手に思い込んで無意識にそういう方向性に引っ張られる。『自分はA型で几帳面な性格だと言われた。普段何気ないことでもそれは几帳面な行動なんだ』『自分はA型だから几帳面でなければならぬ』といったある種の脅迫概念のようなものが出来てしまう。結果としていい加減な血液診断は信憑性のあるものと『後づけの解釈』が作られてしまった」

淡々と話す朱音さんの表情はすごく冷めていた。
世界の裏側を知って失望したような。諦めの顔。

「そして矛盾が発生する。物事の基本は事が起こる『原因』。そこから進む『過程』。そして終わりである『結果』の3つで構成されているわ。でもこの『後づけの解釈』がある所為で物事の一番最初に『結果』が来てしまった。因果律の逆転…ここまではわかる？」

「なんとなく…」

この状況でわかりませんなんて口が裂けても言えないんだよ。

「具体的に言うとうなんですか？」

俺がそういうと朱音さんは部屋の隅に片付けてあった玩具のダーツを取り出した。

我が家のダーツは針で刺すやつでじゃなく先端にくっ付いている磁石で引っ付けるタイプの子供用の玩具だ。朱音さんはそれを壁に立て付けて1メートルほど離れたところで親指と人差し指に矢を挟んで投げる体勢を取る。

「今から私はこの矢を投げる。さて、矢は的のどこに当たるでしょうか？」

「ナゾナゾ？…そんなの投げてみないと分からないっす…」

「ええ。でもこうしたら…」

そういつて朱音さんは何処からか別の磁石を取り出しそれを的の真ん中にくっ付けた。

「さあ。もう一度質問。私が投げた矢は的のどこに引っつくでしょうか？」

「えー…、そりや真ん中じゃないんですか？見た感じ結構磁力ありそうだったし。矢だってそこに勝手に引き寄せられるんじゃない？あ…あつ」

「ようやく分かった？…あの磁石は『結果』なのよ。私がどう投げようと矢は勝手に真ん中に刺さってしまう。過程も原因も関係ない、そこにすでに『真ん中に矢が刺さる』という結果ができているのだから。そこに意味のある理屈なんかないの。そういったものがあの屋上にもあるのよ」

朱音さんはそうして再び磁石を外し手の平に乗せる。

「お前が求めているのはこの磁石。私が見たいのはこの磁石を的に取り付けた人間。…いえ、幽霊かしら。あの屋上にもあるジンクスがありその結果にお前達は無意識に引き寄せられていた。そして、柊かがみは転落死しかけた」

「…それはすぐに解決できるものなのか？」

人が自分の意思とは関係なく飛び降りてしまうような危ないジンクスなんて放って置けない。

放置すればそれは新しい悲劇を産み今度こそ死者が出るかもしれないんだ。

それを解決するのに俺にできることがあるのなら何だってしてやる。

「今すぐは無理ね」

「どうしてですか!？」

「ジンクスには周期がある。いつでも行けば発生するものじゃないから。今日みたいだね」

「じゃあ、いつなら…」

「…金曜日。ちょうど明後日ね。それならいけると思っわ」

「どうして金曜日なんですか？」

「…簡単な話」

そういった朱音さんの表情はまるで今の状況を楽しんでいるかのよう…、

「屋上で女生徒が死んだ日が丁度金曜日だからよ…」

……、

話はそれで終わりだった。

俺はその後今日一日で起きた出来事に頭を抱えているとあることに

気がついた。

「そつだ。朱音さんの部屋どうしょ…？」

自慢じゃないが我が家はそれなりに大きい。

部屋だってそれなりにいっぱいあるのだ。

今も朱音さんは俺の机の上で勝手にノーパソを使ってゲームをしていた。

「朱音さん。部屋どうします？いくつか候補はありますけど」

「別にここでいいんじゃない？この家は一通り見たけどこの部屋が一番広いみたいだし。それに寝るときは幽体になってふわふわしながら寝るから問題ないわ。これが意外と気持ちよくってね。そこらの高級ベットよりすごく寝心地いいの。…それと一応言っておくけど幽体になっている間はお前だろうと私の体には触れないからエロイことを考えても無駄よ」

「心を読まれてる！？」

…それでいいのか？

てかホントに幽霊の体って便利だな。

一回体験してみたくなってきた。

確かにエッチイことできないのはちょっとだけ残念だがいろいろな意味で悶々とした日々を送りそうな気がした。

男なら一度は女の子と同じ部屋で寝たいと思うだろう。それがいろんな意味で叶ったんだ。

今の俺はそれだけで十分です。

とある現状の状況説明（後書き）

学校が始まるので次回は結構遅れるかもしれません

とある部室の大掃除（前書き）

今回からセリフの前にキャラを表記しました。
誰が話しているかわかりやすくするためですが
邪魔だった場合、削除します

後、多分題名も変えてます

とある部室の大掃除

夏にセミが鳴くのは一般的にはオスがメスにアピールする為らしい。ほかにコミュニケーションの一種だとか聞いたことがある。

よく電車でマナーを弁えない連中が狭い空間の中でギヤーギヤーと騒がしく話しているがセミが五月蠅く鳴くのもそれと同じなのかもしれない。

ようするに、俺達が常日頃セミの鳴き声がうるさいうるさいと言っているがセミにとっては俺達だって十分につるさいと思われているかもしれないということだ。

だから、セミはミーンミーン！と鳴くように俺達が暑い暑いと機械のようにボソボソと呟いてるのだってきつと何かの意味が…。

湊「なんで夏になると『暑いーっ！？』って言うんだろっな。そうだ！これ1時間ぐらい議論してみないか？」

かがみ「夏は暑い。ハイ議論終了！。暑さに負けてないで掃除しろ」

つかさ「ゆきちゃん。この本もうカビが生えてるけどこのまま置いておくの？」

みゆき「いえ、それはもう見れてないので処分しましょう。泉さん。つかさんと一緒にしたゴミ捨て場に行ってきたもらってもいいですか？そろそろたまった分を捨てたいので」

こなた「あいよー。じゃあこっちのゴミ袋は私が持つから。つかさこっちお願い」

つかさ「うん」

湊「みんな元気だね。俺なんて暑さで体をバターのように溶けてしまいそうなのに、ああ、このまま空気のように風に漂ってしまいたい」

かがみ「そのまま焼却炉まで案内してあげましょうか？火を起こすには酸素がいるし」

湊「はっはっは、冗談に決まっているではないかがみ君。ささ、掃除掃除っ」と」

言っておくがここ陵桜学園には焼却炉なんて全時代的なものはない。きつとかがみの言葉を吞めば直で火炙りにされてしまうであろう。

俺達は今長年使われていなかった空き教室の掃除をやっていた。元々生徒会行事で学級委員を代表に今使われていない教室を筆頭に大掃除が行われているのだ。

俺達の担当教室は小規模な図書室のようなところで元は何かの部屋だったらしい。

で、なんで俺が子供みたいにうだうだ言ってるかという、…なんでこの部屋クーラー壊れてるのっ！！！！？？

湊「やばい…、マジでやばい。汗と一緒に血液が流れてしまいそうなくらいやばい。今間違えなく遠野湊は生死の境に立っている」

かがみ「へいへい。はい。塵取り持って」

湊「あの、もうちょっとぐらい『大丈夫なの？保健室行く？』とか心配の言葉を述べてくれても決して罰は当たらないと思うんだけど」

最近かがみは俺に対して笑顔で毒を吐くようになってしまった。
一体どこでフラグを間違えたのやら…、

かがみ「だってさつきから暑い暑いってうるさいんだもん。暑いつ
て言うから余計暑くなるのよ」

湊「じゃあなんて言えば良いんだ？」

みゆき「そうですね…。寒いと言っても結局暑いのでギャップの意
味が強すぎなので、暑いと寒いの間で『さつい』と言うにはどう
でしょうか？」

最近みゆきさんもよく分からなくなってきた。

かがみ「いや、どうでしょうかってみゆき…」

湊「それだと俺は常に殺意の波動を撒き散らしてるみたいなんだが、
さつい！！さつい！！」

つかさ「えっ！？何？」

こなた「うおおっ！？湊君が殺意の波動を撒き散らしてる！！」

湊「…な」

かがみ「知らんがな」

返ってきたつかさとこなたをびっくりさせただけだった。

湊「つかさおかえり！！途中で夜盗とかに会わなかった？危なく

なつたらすぐに呼んでくれよ」

つかさ「あ、ありがとうかいくん…。私は大丈夫だよ」

つかさは邪気0%の笑顔で答えてくれる。

はぁ、つかさがやつぱり俺の中の天使だよ。

彼女だけは何があっても変わりませんように…、

こなた「それにしても湊君がこっちに来てからやけにこういうものが見られるようになったよね」

こなたが本棚から『こういうもの』を手取る。

それは筆で書かれた昔の字でなにが書いてあるのはわからないけど、取りあえず『オカルト』系の薄い草書だった。

見ればほかの本棚の列にも似たような本がちらちらを目に入る。

多分ここは『そういうもの』を研究していた部活か何かだったんだろう。

つかさ「すごいね。とつても綺麗な字なんだけど何が書いてあるのかわからないよ」

湊「大丈夫だつかさ、俺にもわからん」

辛うじて『ゑ』が『え』だとわかる程度である。

湊「ムにゅむにゅまにやしやぎやまー『え』ぼきよほほほー『え』ばあー」

こなた「湊君が未来語を話し始めた…」

かがみ「違うから、絶対にそれは退化してるから、1億年ぐらい」

みゆき「古典もある程度勉強をすれば段々と解読するのが楽しくな
ってきますよ」

こなた「それはきつとみゆきさんだけだよ」

つかさ「古典は眠たいよねー」

かがみ「お前ら…」

俺はそんなバカが大好きです。

かがみ「ふざけてないで早く掃除終わらせるわよ。遊んでたら日が
暮れちゃうわ」

みんな「「はい」「」」

そして、1時間がたった。

俺は4つほど隣り合っている埃まみれ本棚を雑巾で拭いていた。

こればなかなかしんどい、…学校もけちけちせず掃除機ぐらい貸
してくれればいいのに、

そういう便利なものはすべて今必要な教室に割り当てられてしまっ
たのだ。

壁に干渉するたびに角度を変えて掃除してくれる自立型掃除機数十
機を目にした時はさすがの俺もこの学校に度肝を抜かした。

主に学校の経費の無駄遣いの、まったく神聖な学び舎で何やって
るんだか、だから俺は理事長にこう言つてやりたい。学食にドリン

クバーをください。と、

湊「うわっ！！ごっほごっほ！？くわぁ…、埃が鼻に入ってくる」

弛んでた所為で肩がほかの本棚に当たり、そして当たった所為で少し動いた本棚がまた別の本棚に当たった衝撃でその隙間から埃が溢れ出た。

暑いし臭いし埃っばいし、散々だ…。

こなた達と一緒に言うのがせめてもの救いだな。ほかの男子が一緒になった日にや怒り狂ってモップ片手にこの前不当に拘束されたお返しをやっているだろう。

俺は女子には決して怒らず紳士に対応できるが男子に対しては割と短気だ。

そこらへんほかの男子も同じかもしれないが、

みゆき「遠野さん。そちらは大丈夫ですか？私の担当は終わりましたので、よろしければお手伝いしますが」

湊「大丈夫大丈夫。それよりこなたかつかさの所行ってやってくれ。あの2人はいろいろと放って置けないからな」

つかさ「きゃーっ！？こなちゃん虫があーっ！っ！」

こなた「おおー！？かがみ！！さあ、ご飯の時間だよ！！」

かがみ「食つか！？ていうか食えるかあーっ！っ！」

湊「…ごめん、やっぱ俺が行くわ」

みゆき「ははは、ではよろしく願いします」

本当に放つとけない連中だ。

誇り臭い本棚群から出ると地べたに尻餅をついたつかさとその傍で中睦まじく半狂乱で追いかけてっこをしているこなたとかがみがいた。取りあえず、あの中に俺が入るのも（身の危険的に）よろしくないので一先ずつかさの傍に駆け寄った。

湊「つかさ。大丈夫か？」

つかさ「う、うん。もうびっくりしすぎて気を失うかと思ったよ」

涙目で言うつかさ。

か、可愛い。泣き顔のつかさも可愛いよ、

湊「あ」

…そこで俺はふと気が付いた。いや、気が付いてしまった。

M字開脚という姿勢がある。男子がやると即座に鈍器で撲殺される死のポーズだが女がすると逆に崇め奉られる悪性と神聖を帯びた聖なる姿勢である。

俺の前で尻餅をついた泣き顔のつかさは丁度そんな格好で座り込んでいた。

…俺だって男子。あんなにも見えそうで見えないスカートの中を見せられたら覗かずにはられない。

こつもつ少し後ろに下がって…、来たっ！！！（、、）

世の男子を釘付けにする神聖な絶対領域の中心にある白い布地。眼福……！！圧倒的眼福である……！！

湊「ありがとうつかさ、君のおかげで俺はまだ頑張れる」

つかさ「え？」

未来永劫俺はこの白い布地を記憶のメモリーから消去することはないだろう。

今日ほどこの学校に転校してきてよかったと思ったことはない。

つかさ「あれ？虫どこいったんだらう？」

湊「む、そういえばいないな。つかさが大きい声だすからびっくりしてどっか行っただら。立てるか？」

俺はつかさに手を貸し起き上がらせてあげた。

そつえばこなたとかがみは？

かがみ「はあ、はあ。いい加減懲りたかこなた」

こなた「う、うおお…、降参ですはい」

こなたがかがみに揉みくちやにされていた。

相当暴れたのか制服も何故か両者よれよれである。

むー……、

湊「かがみはまあ…、つかさと似てるからいいとして、何故かこなたに色気が感じない…。やんちゃした子供を見る親のような心境を感じてしまう」

こなた「大佐。ここに真の敵がいます」

かがみ「了解。殺せ」

こなた「イエッサー」

湊「え？ちょ！？待て待て！！俺はきわめて素直な感想をつ…」

こなた「なお悪い！！」

湊「くぁー！！待ってくれ待ってください！！俺の間接はその方向には曲がらなっ…あああああっつ！！！！」

俺の寿命が少し縮んだ気がした。

湊「うぐ、うぐ…」

こなた「まったく。失礼な。私だつてこう…、貧乳には貧乳なりの魅力があつてだね。つまり、貧乳だつてステータス…で」

みゆき「さきほどすごい叫び声でしたが皆さんどうかいたしましたか？」

隠しボス。登場（胸囲的な意味で）

みゆき「一体何が…、あれ？泉さん。どうして両手を地面につけてうな垂れているのですか？」

かがみ「みゆき。いろんな意味でタイミング悪い」

こなた「うつうつ…、わが軍は滅んだ。巨乳帝国の圧倒的な戦力の前に成すすべもなく、もう…、好きにして（ガックシ）」

つかさ「こなちゃああん」

みゆき「え？ええっ！？」

湊「ナンマイダム」

湊「こなたの絶望は深い。^{貧乳}」

俺は、死闘の末破れ去った貧乳軍総司令の亡骸の前で、その勇氣に敬意を評しその場で静かに手を合わせた。

湊「終わったーっ！！！！」

みゆき「皆さん。お疲れ様でした。こんな時間まで本当にありがとうございます」

太陽がようやく水平線の彼方に沈もうとした時刻に俺達による灰教室の清掃は終わりを告げた。

こなた「はあー、なんかすごく見違えたね。『使用前』『使用后』ぐらいの違いはあるよ」

湊「これでクーラーが使えりゃ文句ないんだけどな」

かがみ「それはしょうがないでしょ。床や壁の汚れ掃除ならともかく機械の修繕なんて私達にはできないんだから、それにこの教室をこれからも使う保障はないんだしこのぐらいが妥当よ」

つかさ「もうすぐ夏休みだし、終わったらクーラーなくても平気になるよ」

湊「そうになると暖房がほしくなったり…」

かがみ「贅沢のきわみだな」

みゆき「クーラーについては私のほうで委員会に相談しておきます。ここは空気の入れ替えも含めてしばらく空けておきますが皆さんはもうお帰りになれますか？」

こなた「私は帰るよー。もうすぐみたいアニメあるしね。湊君は？」

湊「俺はちよつと用事あるからもう少しいるよ」

どうやらここで解散のようだ。

つかさ「お姉ちゃん。私はどうしようか？」

かがみ「私は……、」

ちらり、とかがみは俺を観察するように見る。

…そういうことね。なんというか。俺も人のこと言えた義理じゃな

いけどかがみも相当お節介だ。

湊「かがみも俺とちよつと用事があるんだ」

かがみ「そつ、そうなの。そういうわけだからつかさ。今日だけは1人で帰ってくれない？本当にごめんね」

つかさ「そうなんだ。何か分からないけどがんばってね」

こなた「むむ！！怪しい雰囲気。さては2人で真夜中の逢引とか」

かがみ「ちちち違うつつうの！！ただの用事よ！！あんま深く詮索すんな！！そういうことだから、ばいばい！！みゆきもまた明日！！」

みゆき「はっはい。それではまた明日」

こなた「何か聞いてはならぬ雰囲気。しょうがないね。それにしてもようやくあと1日でお休みだあ！。もう少しだけがんばろう」

つかさ「おー！」

そして3人は果てしなく長い廊下の奥へと消えていった。

後は、所在なさげにポツンと立つ俺とかがみ。

正直、もう眠たくてこんなことせず真っ直ぐ返って朱音さんのやさしい罵倒を聞いて腰を落着きたいところなんだが、事が明日なだけにもう時間がない。

それにこんなところで得た大ヒントをワザと見逃す道理もないのだ。たまたま見た資料から得た情報。5年前に部員一定数以下意外の不

可思議な要因で廃部となった。

この、オカルト研究会の部室を。

.....、

とある事件の決戦前夜（前書き）

連続投稿です

とある事件の決戦前夜

夕焼けの通り抜ける廊下は全体がオレンジ色に輝いていて質素なはずの一本道がすごく神秘的なものに見えた。

赤く染まる廊下の風景はまるで学園ドラマの一シーンを実際に見ているようだ。

きつとこういう場面で告白をすると輝かしく成功するのだろう。

ただでさえここから先はホラー。怖い思いしないように変な雑念は振り払わなければならない。

湊「というわけでかがみ。俺と付き合ってくれ」

かがみ「は？何いきなり？」

湊「……………だから、付き合ってくれない？」

かがみ「だから今付き合ってるじゃない。何言ってるの？」

湊「……………」

まあ…………、現実なんてこんなものである。

とまあ小芝居は置いて、

湊「考えたら別にかがみは来ることなかったんじゃないか？そもそも俺がこれから何やるかも言っていないし」

かがみ「こんな時間に居残りをしてまでやることなんて大体わかるわよ。特にアンタの場合はね」

湊「愛の告白？」

かがみ「拳に乗せて返してあげましょうか？」

湊「よし、冷静に話しあおうじゃないか」

最近のかがみはちょっと暴力的な気がします…。
やっぱりかがみは俺のことが嫌いなのだろうか。

かがみ「はあ、そんな冗談言ってる時間なんてないでしょう。学校は6時が完全下校なんだから、ほら、さっさと行く」

湊「わわっ！？押すなって！！」

かがみに背中を押されながら俺はまたこの古びた部室に足を踏み入れた。

一応、掃除はしたんだけど、どこか古びた感が否めない部室は赤い夕焼けが白いカーテンを突き抜けて真っ赤に染まっていた。

『暑いから肝試ししようぜ』とか言う人の気持ち俺は今までよく理解できなかった。

だって幽霊にあった瞬間、俺はすぐにこの世とおさらばして夢の中でエンジョイしてたもんね。

でも今ならわかるんだ。無意識に体中を駆け巡る鳥肌が、ずっと暑いと嘆いていた部室は今や極寒の地と化していた。

かがみも意識的かどうかわからないけど、どんどん俺との距離が詰まってきた。………体は寒いが心はドキドキであった……。

俺は綺麗に一列にならんだ本棚の一角から一冊の古本を拝借する。

かがみ「何それ？」

湊「この部活動の活動報告書。みたいなもんかな。ここらへんを掃除してたら偶然みつけたんだ」

明らかにボロつちい古本の表紙には掠れた文字で『オカルト研究会』と書いてあった。

俺はゆっくりとした動作で表紙を開く。

かがみ「これは…、」

最初の一ページ目にあったのは、5人ぐらいの人の名前。多分、先代の部長の名前あたりだろう。

でも、もうほとんどの字が掠れて読めない。辛うじてわかったのは俺達の良く知ってる最後の5代目部長……。

かがみ「千里朱音…。これって、朱音さんのことかな？…どうしてオカルト研究会の部長の名前にあの人が…」

湊「まあ、俺もあの人はよくわからないし、何やっても不思議じゃないけど」

あの人部活やってる姿が想像できない。自分でも友達いないとか遠まわしに言ってたし。

パラパラとページを捲っているとこの月には何をやってたかなど記事が、月、年ごとに報告書のようにまとまっていた。

朱音さんの代の記録を探ってみよう。

きつと最後へんに書いているかな。と思い一気に後ろのページを捲

ってみるとそこはまったくの白紙だった。

…どうやらこの履歴書は最後まで書ききることがなかったらしい。後ろから捲っていると丁度3分の2ぐらいのところですよやく文字が出てきた。

もう少しだけ捲ってみよう。すると今度は出席簿のような部員の一覧が載っている場所があった。

湊「天王……瑚……朗……ちは……。神戸……、駄目だ。全然字が読めない。なんでこんな途切れ途切れなんだよ。かがみ。これ読めたりする？」

かがみ「無理よ。所々破けてるし。これが例の事件と関係あるの？」

湊「わかんねえ。でもこの進学校でオカルトってんだから何か情報があるかと思ったんだ。はつきり言って俺達は情報が少なすぎる。朱音さんは何か知ってるだろうけど話してくれそうにもないし、だけど、少しでも明日の為の武器がほしいんだ」

かがみ「明日……明日やるの？」

湊「ああ。朱音さんがそうしろって言ったからな。あそこには『一度入れば転落死してしまう可能性がある』ってジंकスがある。本格的に工事に入ってしまったらもう終わりなんだ。一刻の猶予もない……。俺は本当は今日がよかったんだけど……」

かがみ「ねえ、…もしかしたら朱音さんが今回の首謀者って線はないの？今一番怪しいのってあの人じゃない。屋上にもいたし」

湊「それは…、多分ないと思う」

かがみ「どうして？」

湊「あの人が犯人ならわざわざ俺達の前に出てきて、あまつさえ俺の家に住もうなんて言わないと思うんだ。結構陰険だからなあのは。ニートだし」

かがみ「ニート関係あんのか……？」

朱音さんはどちらかというと正面から向かってくるのではなく裏でこそそそしてるタイプだろう。

灯台下暗しという線も捨て切れないが、考えたら限がないのでやめておこう。

大方暇になったんでからかってやろうとかそんなところだろうさ。

昨日なんて寝るとか言っておいて5時ぐらいまでRPGやってたし、おかげで俺が全然寝れなかった。

湊「少なくとも、朱音さんは首謀者でなくとも、オカルト関係とはすごく密接に関係していることがわかったんだ。いざとなれば明日問い詰めればいい。そういや、ここって朱音さんの部屋なんだから、ここらへんにあの人の弱みの1つでも置いてないかな……？」

黒井「あれ……、まだ誰かおんのか？」

突然後ろから声がした。

かがみ「黒井先生……？」

黒井「柊、それに遠野もか。高良から掃除はもう終わったって報告を聞いたけど、まだやりのこしでもあんのか？」

どうやら教室を見に来たらしい。

かがみ「えっと、そんなところです」

黒井「まあ、ほどほどにな。もうすぐ下校時刻やし、それにもうじき期末テストもあんねんで、柊はともかく遠野はきちんと勉強してきいや」

湊「なんで俺だけなんですかつ！？」

まったく失礼な先生だ！！

それでも編入で転校できるぐらいオツムはいい方で…、

黒井「編入試験の時、現国はそれなりやったけどほかはほぼ平均を下回ってたやろ。得に数学とか」

湊「ばうっ！？」

かがみ「アンタどうやってここ受かったの……？」

黒井「最後の面接の時に、理事長に向かって『ババアだ！！ババアの後ろにさらに何か変なババアがいる！！ババアの後にはババアのマトリョーシカなんて一体誰得なんだ！！』て思っきし罵倒して売り言葉に買い言葉で『いろいろ』あつたらしいで、その所為で変に気に入られたから合格したらしい」

かがみ「ほぼ偶然じゃん…」

湊「実力だ！！」

あれは怖かった。面接なんて瑣末事が一気にどうでもよくなるくらい。

眉間にしわよせたバアさん校長の後ろでさらに眼飛ばしたババアがこつちを睨んでくるんだ。

俺に何の恨みがあるんだ思わずにいられない出来事だった。

教室の様子とクーラーを調子を点検した後再三の早よ帰れ宣告して黒井先生はいなくなった。

だがそんなことで素直に『さようなら先生』また明日学校で『
など言つて帰るほど俺はいい子ではない。
本棚に本を戻した後、今度は1つだけあった机の引き出しを物色する。
…が、開かない。

湊「お、…鍵が掛かってる」

……これだけ古い机なんだしガチャガチャ揺さすれば壊れるんじゃないだろうか？

ダンダンダンダンダンダン！！！！

パキンっ

かがみ「アンタ何やってのよ！！」

湊「無論、調査だ」

何も可笑しなところはない！！

かがみ「窃盗にしか見えねえよ！！　　ったく、せつかく綺麗にしたのに壊してどうすんの…、何かめばしい物でもあったのか？」

湊「…指輪だ」

俺の丁度人差し指サイズの小さくはない指輪が一つだけ入っていた。真ん中に名称がわからないルビーみたいな赤い宝石がついている。夕焼けに反射してる所為でやけに美しく感じられた。

ほかに探すかそれ以外はまったく空。

…ひよつとしてこれ、婚約指輪か？

湊「よし。持って行こう」

かがみ「ええー」

湊「これを獲物に朱音さんのあんなことやこんなことをいろいろ強請れるかもしれない…。婚約指輪ならなおさら」

まさかあの陰険下道の人に好きな人がいたとは、世の中ってわからないもんだ。

かがみ「ちょっ、いいの！？」

湊「どうせ5年間も放置されてたんだし誰も取りに来ないって、もしかしたら特殊なアイテムかもしれないし、まさかかがみ、ほしいの？」

かがみ「そういう意味じゃ…、ああもう！！　　なんか全部どうでも良くなってきた。いろいろありすぎで頭で処理しきれない…」

かがみの脳内が容量を超えてしまったようだ。

無理も無いが、やはりこういうのは慣れないとキツイみたい。

指輪をポケットに突っ込んだ後、引き出しをすべて閉め帰り支度を
した。

そろそろ完全下校だ。

まだ気になることは沢山あるけど、何事も引き際が肝心なのだ。

かがみとは駅までは一緒である。

かがみ「明日、なんだよね。…それで今まで事、全部終わるのかな
…？」

湊「どうだろう…。終わる気もするし、終わらない気もする。少な
くても今のモヤモヤした空気よりは少し良くなるんじゃないか？」

屋上で自殺した生徒は誰？とか6月下旬から10月まで空白は一体
？など、

全部が全部、明日で解決するとは思えない。

それでも、小さな一歩を積み重ねていけば、いつか大きな真実にた
どり着けそうな気がする。

もともとゴールなんて見えない。駄目もとても俺達は進むしかない
んだから、

そんな期待にも哀愁にも似た感情を思わせた2人の姿を夕焼けだけ
が俺達のはるか上から見つめていた。

とある事件の決戦前夜（後書き）

次回（多分）一部完結！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9130t/>

Rewrite of LuckyStar

2011年10月9日06時13分発行